チュチェ思想の原理解説 4

自主と繁栄の門は先軍で



自主と繁栄の門は先軍で

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ103（2014）年

「偉大な金日成同志と金正日同志が切り開いた自主の道、先軍の道、社会主義の道をまっすぐに進むところに、朝鮮革命百年の大計の戦略があり、最終的勝利があるのです」

金 正 恩

はじめに

今日、地球上には政見と信仰、社会制度やその発展水準の異なる200あまりの国がある。

自主と繁栄は、政見と制度、信仰と民族の差を問わず世界の各大陸、各地域人民の一致した念願である。こういう意味で自主と繁栄は、人類の全世代を貫いている普遍的志向であると言える。

しかし、自主と繁栄を達成する方途にたいする理解はそれぞれ異なっている。

ある人は領土が大きく人口が多ければ隆盛・繁栄をたやすく達成できると考え、またある人は経済と技術が富強・繁栄の表徴であると見たりする。

領土が大きく人口が多いという国、経済と技術が発達したという国であっても、外部勢力の支配と従属から脱しておらず、新しい社会建設において紆余曲折をなめていることをわれわれは少なからず目撃した。

自主的発展を遂げるためにはどうすべきか、富強・繁栄の裏づけは果たして何であるのか。

これは現時期、人類の存亡とも関連する重要な問題として提起されている。

それにたいする解答をチュチェ思想に基づく先軍思想から求めてみようと思う。

自主と繁栄の門を先軍で開いてみよう。

目　次

「わたしは金日成同志の遺志を体し、人民軍を掌握して先軍政治を敷き、もっとも厳しかった『苦難の行軍』と強行軍の時期に、帝国主義者の対共和国圧殺[redacted]

1. 銃剣と自主性

自主性は社会的人間、国と民族の生命である。人々が国をつくって暮らすのは、自らの自主的要求を実現するためである。それゆえ自主性を失っている国は独立国家だといえない。

今日の世界を見ると冷戦時代よりもっと複雑で騒がしい。

帝国主義者の策動により、世界の平和と安全が破壊され、各国と各民族の自由な発展、繁栄が阻害されるなど、国際社会では多くの事態が生じている。

強盗さながらの力の支配論によって主権国家に対する侵略と戦争、干渉と圧力が憚りなく敢行されているのが今日の現実である。

こういう現実は、帝国主義者の侵略と戦争策動を打ち破り国と民族の発展と繁栄をもたらすための根本的裏づけが他ならぬ強い銃剣にあるということを物語っている。

17 世紀、フランスの数学者であり哲学者であったパスカルは、「力を伴わない正義は無効であり、正義を伴わない力は横暴である」といった。

自主性をめざす闘争において基本は銃剣であり、銃剣と自主性は一つに結びついている。先軍思想は銃剣と自主性を一つに結合させた新しい革命の原理、先軍革命の原理を解

明しており、そこから出発している。

一般的にすべての事物現象にはその根本に置かれる原理がある。人間は事物現象の原理を知ってこそすべての思考と実践を合理的に行っていくことができる。

同じように先軍で自主と繁栄の門を開くためには何よりもまず、その根本におかれている先軍革命の原理について正しく理解しなければならない。

これが第一の工程になるため、先軍革命の原理から話を始めようとする。

1） 革命において基本は銃剣

先軍革命の原理は、銃剣と革命の相互関係を明らかにした銃剣哲学に基づいている。

金正日総書記は次のように指摘している。

「偉大な領袖金日成同志が示し、一貫して堅持してきた銃重視、軍事重視の思想と路線は、わが党の先軍政治の基礎であり原点です」

人民大衆の自主性を実現するための革命は、前人未踏の道を開いていく闘争である。

その発生、発展の過程には様々な要因が作用するが、それらの要因のうち基本は銃剣である。 それは革命が帝国主義をはじめとする反革命勢力との熾烈な力の対決を伴うからである。

革命は銃剣によって切り開かれる。

革命は搾取階級、搾取制度を覆して新しい社会制度を樹立するための闘争から始まる。搾取階級、支配階級は決して自分の政治的支配権を自ずから放棄せず、反革命的暴力に依拠して人民大衆の自主的権利を蹂躙し抹殺する。

過去の奴隷所有者社会と封建社会を見ても必ず膨大な暴圧機構が設置されていたが、その理由は他にあるのではなく古い社会制度の改造を求める人民大衆の闘争を徹底的

に弾圧しようというところにあった。

搾取階級と古い社会制度に反対して立ち上がったものの、無残にも鎮圧されたB.C.1 世紀ごろの古代ローマのスパルタクス奴隷暴動や 17 世紀半ばのロシアのステンカ・ラージン農民戦争、 そして 19 世紀の末、朝鮮の甲午農民戦争がそれを見せている。

銃剣によって革命が切り開かれるということは労働者階級の革命闘争史が実証した。

朝鮮革命は銃剣によって成功裏に切り開かれた。

1905 年、強盗的な「乙巳5条約」を捏造して朝鮮に対する植民地支配権を掌握した日本帝国主義は、国の独立をめざす朝鮮人民の闘争を武力で悪辣に弾圧した。1919 年に起こった 3.1 蜂起でも、日本帝国主義によって 10 万名あまりの人々が犠牲になり、4 万 6700 名の愛国的人民が逮捕・投獄された。

銃剣や大砲でもって弾圧する敵に請願やデモ、筆や言葉で対抗しては決して勝利することができない。武装した敵を打ち倒すもっとも正しい方法は武装闘争である。

偉大な金日成主席は革命運動の初期、父親から 2 挺の拳銃を遺産として譲り受けた。この 2 挺の拳銃には、武装した敵とは武装を持ってたたかわなければならないという父親の頼みが込められていた。

主席はこの遺産の意味を胸に深く刻み込み、1926 年 10 月 17 日、日本帝国主義を打倒して朝鮮の解放と独立を達成し、

朝鮮に社会主義、共産主義を建設し、ひいてはすべての帝国主義を打倒して世界に共産主義を建設することを綱領とする打倒帝国主義同盟を結成した。

主席はその後、「武装はわれわれの生命だ！武装には武装で！」という革命的スローガンを提示した。 このスローガンには武装した敵を打ち倒して祖国を解放し、朝鮮革命を勝利へと導く唯一の道は銃剣にあるという銃剣哲学がこめられている。

銃剣哲学を信念としたがゆえに、朝鮮人民は当時世界的な軍事強国であり、アジアの盟主として躍起になっていた日本帝国主義を打ち破って、祖国解放の歴史的偉業を達成することができたのである。朝鮮革命だけでなく、ロシア、中国、キューバなど諸国における革命の勝利も銃剣で切り開いた闘争の結果であった。

革命は銃剣によって前進し完成される。

凡そ革命はあらゆる挑戦と試練を克服していく困難な闘いである。革命はその開拓も難しいが、勝利した革命を自己の軌道から脱線することなくまっすぐに前進させ、最後まで完遂するのもやはり難しい。

帝国主義者と反動勢力は社会主義偉業を抹殺しようと悪辣に策動する。帝国主義者との対決で勝利し革命の獲得物を守りぬくためには、それに相応する力を持たなければならない。

銃剣は帝国主義者の策動を打ち破り、革命を防御する上で最も有力な手段である。

革命が銃剣によって前進し完成されるということは今日の朝鮮の現実が実証している。

金正日総書記が逝去した後、朝鮮の情勢はいっそう厳しくなった。

「急変事態」、「体制変化」について云々しながら帝国主義者と反動層は連合して朝鮮を圧殺するための軍事的侵略策動を狂乱的におこなった。

銃剣を持って襲いかかる敵に「慈悲」と「寛容」を期待することほど愚かなことはない。それはひとえに強い力で対抗して断固と退けなければならない。

金正恩同志は銃重視の旗をより高く掲げ、敵の対共和国圧殺策動をそのつど退けて祖国の尊厳と安全を守りぬき、先軍朝鮮の気概を遺憾なく誇示するよう導いている。

金正恩同志は2012年1月1日、金正日総書記が先軍指導の初の足跡を残した近衛ソウル柳京守第105戦車師団を訪ね、いささかも揺るぎなく銃剣を強化していく自らの信念と意志を示した。

革命の武力を全面的に強化してアメリカ帝国主義とその追随勢力を退け、国と民族の自主権を固く守り通そうというのは金正恩同志の確固たる意志である。

2012年3月の初め、恒常的に敵と銃口を向け合っている

板門店を視察し、続けて西海岸の前方を守っている椒島防御隊を、4 月の初めには東海岸の前方を守っている麗島防御隊を視察した。2012 年 1 月から 2013 年 3 月まで数十回も人民軍区分隊を訪ね、軍人を「一当百」のつわものに準備するよう導いた。

金正恩同志が銃剣を強化しそれに依拠しているがゆえに、今日、朝鮮は衛星保有国としての地位をさらに強め、侵略戦争策動に狂奔する帝国主義者に痛烈な懲罰を加えながら国と民族の自主権を固く守っているのである。

銃剣を強化してそれに依拠せずには革命の獲得物を守りぬくことができない。それは旧ソ連の 70 年あまりの歴史を通じてもよくわかる。

歴史のページには、自己の運命を切り開こうという人民大衆の長久の闘争の過程で血で持って得た貴重な経験と教訓、真理が深く刻まれている。旧ソ連の有名な作家ゴーリキーは、「過去を知らずには現在の真の意味と未来の目的が分からない」と言っている。

周知のように 1991 年 12 月 25 日、モスクワ・クレムリンの上空に靡いていた赤旗が降ろされた。 地球の陸地面積の 6 分の 1 を占めて 70 年あまりも存在していた人類史上初の社会主義国家ーソ連がその存在を終えてしまった。

その原因についてはいろいろと説明できるだろうが、主な原因は革命の獲得物を最後まで守るべき銃剣がしっかりとし

ていなかったところにある。

旧ソ連が社会主義 10 月革命で勝利し、ファッショ・ドイツの侵略に抗する祖国戦争で勝利することができたのは、ほかならぬ強力な革命武力があったからである。

ソ連を立ち上げ、ファシストの侵略者を打ち破って祖国の自主権と革命の獲得物を守るうえで重要な役割を果たした赤軍が、修正主義者、現代社会民主主義者によって思想的に瓦解し始めた。軍人たちの階級意識、反帝精神が濁りはじめ、厭戦思想、ブルジョア思想文化が浸透して軍隊の革命性と戦闘力が麻痺されるようになった。

1991 年 8 月、ソ連指導部の進歩的人物は国家非常事態委員会を組織し軍部を動員して崩壊していくソ連を救おうともしたがだめだった。

当時、命令を受けた軍のある高位級将官は、自分の部隊は市街に突入しないであろうと反社会主義勢力に保証までしたという。そうかといえば命令を受けてモスクワに進入した部隊は自らの任務を放棄し、社会主義の裏切り者の側についてしまった。結局、軍部の支持を得られず、8 月事件は三日目に失敗に終わり、 同年の 11 月 6 日ソ連共産党が解散され、12 月 25 日にはソ連が解体された。

世界的な強国として威容をとどろかせていた自らの祖国が解体され、血と汗で獲得したすべてが失われるのを思想のない銃剣、さびている銃剣は決して防ぐことができないという

教訓を、8 月の事件は残した。

それゆえこの痛ましい事態についてアメリカの VOA 放送までも 1998 年 1 月 9 日こう評した。

「ソ連軍は自分の国が崩壊し、ついで軍隊の名まで奪われる時刻にも泥酔してよろめいた。それが彼らの臨終であることを全然意識しなかった。結局、彼らは中立固守というゴルバチョフの毒入りの酒に酔ってソ連を崩壊させ、今になっては彼ら自身も浮浪者同然の身の上となった」

成功と失敗の入れ混じった旧ソ連の 70 余年の歴史は、銃剣に自主性をめざす闘争の運命がかかっていることを実証した。

革命の勝利は銃剣の勝利である。銃剣を捉えて強化して行くとき、革命はもっとも正しい軌道に沿って勝利のうちに前進していくことができる。

銃剣は、革命が成功裏に切り開かれ、勝利のうちに前進し完成されるようにするもっとも威力ある武器である。

2) 軍隊は党、国家、人民

先軍思想は、軍隊は党であり、国家であり、人民であるという先軍の原理を明らかにしている。

金正日総書記は次のように述べている。

「特に党員と勤労者に、軍隊はすなわち党であり、国家

であり、人民であるという独創的な先軍の原理がチュチェ思想に根差していることを深く認識させなければなりません」

自主性をめざす人民大衆の革命偉業、社会主義偉業の遂行において、労働者階級の党と国家、そして人民は非常に重要な位置を占めている。

軍隊が党であり、国家であり、人民であるという先軍の原理は、社会主義偉業の遂行において重要な位置を占めるこの党や国家、人民の運命が銃剣を握った革命軍隊によって決定されるということを明らかにしている。

軍隊が党であることは、革命の軍隊によって党の運命が裏打ちされるという意味である。人民大衆の自主偉業の前進を阻もうとする帝国主義者と反動層の反革命的策動において第一の標的は、社会主義偉業の政治的導き手である革命的党である。帝国主義者と反動層は革命の前進運動を阻み抹殺しようと革命的党の権威と尊厳を毀損させ、その存在を無くそうとあらゆる術策を尽くしている。

帝国主義者の策動を打ち破り、党の存在と権威を固く守りうる有力な武器は革命軍隊だけである。

軍隊によって保証されなければ党は社会に対する政治的指導は言うまでもなくその存在さえ維持することができない。

自主性をめざす人民大衆の革命闘争史を見れば、朝鮮革命のように困難で複雑な革命、前人未踏の険しい道を切り開いてきた革命はかつてなかった。

暴虐な米日帝国主義に反対する 2 回にわたる革命戦争、外部勢力による国土分断の状況下での 2 段階にわたる社会革命と社会主義建設、東欧諸国における社会主義の崩壊と自然災害による度重なる難関を克服しながらおこなった祖国の防衛戦と強盛国家建設をめざす闘争の困難さと複雑さは実に筆舌に尽くしがたいものであった。他の国であったら千回、万回も滅びて久しい苦難と試練の連続であった。

こうした厳しい中でも朝鮮労働党が革命をひとえに勝利一途へと導いてこられたのは、人民軍が党の軍隊として、党の偉業、社会主義偉業を忠実に奉じてきたからである。

金正日総書記は、先軍革命指導を始めた当初から軍隊が党の軍隊としての自らの使命を全うするよう賢明に導いてきた。

1960 年 8 月 25 日、朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守第 105 戦車師団を訪ねた総書記は、革命伝統を擁護固守し、継承発展させる問題、軍隊の戦闘力の強化における問題、社会主義建設における人民軍の重要な役割に関する問題など、一々具体的に指導しながら、人民軍の基本使命と闘争伝統を生かして敬愛する金日成同志を首班とする党中央委員会を命を賭して守ろうというスローガンを高く掲げて行くようにと強調した。

人民軍は領袖の軍隊、党の軍隊として革命の年代記ごとに領袖擁護のスローガンを高く掲げてきた。

「偉大な金日成同志のために命をささげてたたかおう！」、「全軍が革命の首脳部を決死擁護する今日の 7 連隊になろ

う！」、「偉大な金正日同志を首班とする革命の首脳部を生命を賭して守ろう！」、「敬愛する金正恩同志を首班とする党中央委員会を生命を賭して守ろう！」など。

強力な革命武力を忠実な同志として持っている党だけがあらゆる風波の中でも自分の存在を維持しながら革命を最後まで導きうるということを朝鮮の現実ははっきりと見せた。

国家政権を掌握し守るための闘争は、人民大衆と反動勢力間のもっとも熾烈な力の対決戦である。反動勢力は人民大衆が政権の主人になることを決して袖手傍観せず、自ずと政権の座から下がろうとはしない。

強力な革命武力なしには反革命の必死の反抗を打ち破って政権を掌握することも守ることもできない。軍隊を捉えていないとすでに掌握した政権も奪われるということは、チリ大統領であったアジェンデの場合を見てもよくわかる。

1970 年 9 月 4 日、大統領に当選されたアジェンデは、アメリカ帝国主義と寡頭政治の支配を一掃し、チリの民族的自主権を強化し、広範な勤労大衆の境遇を改善するための一連の進歩的な社会・経済改革を実施した。

土地改革を実施して　地主が所有していた土地を農民たちに分与し、大農場制を廃止した。また、アメリカ独占体が所有していた銅鉱山をはじめとして主要工場や鉱山、銀行、逓信部門を国有化した。　チリにあったアメリカ帝国主義の侵略的軍事基地と経済、文化的侵略機構を撤廃し 、社会主義諸

国など進歩的国々との親善と協力を強化するために積極的に活動した。

チリで社会主義革命の炎が燃え上がるとアメリカは、ラテンアメリカに「第2のキューバ」が生まれたと悲鳴を上げ、アジェンデ政権の転覆にとりかかった。そのためにアメリカは特別の資金1千万ドルを即時支出させ、5千万ドルに当たる武器をチリに搬入した。反政府勢力をそそのかし武器統制に関する法令を採択させては人民連合所属下の各党の傘下機関が所有していた武器をすべて没収するようにした。現情勢の要請に即してアジェンデは当然、勝利した革命の獲得物を守るための対策を講じるべきであったが、社会・経済改革にだけ没頭し、軍隊と警察を掌握することをおろそかにした。

結局、1973年9月11日、アメリカのそそのかしのもとに親米分子であった陸軍指令官ピノチェトが起こしたクーデターを阻止できず、政権を奪われるようになった。

当時65歳であったアジェンデは、投降は卑怯なものの仕業だといいながら直接自動小銃をとって、大統領宮殿で7時間も勇敢に戦い、犠牲となった。その時アジェンデが軍隊を掌握してそれに依拠したならば、アメリカの干渉と反動勢力のクーデター企図を破綻させることができたであろう。

革命的政権の誕生と強化、発展の過程があくまでも銃剣によって保障されるため、軍隊はすなわち国家であるといえるのである。

軍隊が人民であるということは、革命軍隊があってこそ人民が自主的で創造的な生活を思う存分享受することができるという意味を持っている。

革命軍隊の重要な使命は、敵の侵略から革命の獲得物を守り、国と人民の安寧を守ることにある。

帝国主義者の独断と専横、強権行為がさらに露骨になっている状況のもとで、強力な軍事力は自主的人民の第一の表徴となる。

アメリカ帝国主義によって国の自主権がはなはだしく蹂躙され、奴隷の運命を強いられたイラク人民の実態がそれを物語っている。

2003年3月、再び戦争を起こしてイラクをたやすく占領したアメリカ帝国主義は殺人と略奪を事とした。

イラクを占領したアメリカ帝国主義者は無辜の人民を虐殺し、彼らの宗教的信仰を冒涜し、貴重な文化財を数多く略奪した。収監者を裸にさせて恥をかかせ、殴り、強姦するなど、人間の想像を絶する野蛮な行為をも憚らなかった。

イラクは古代文化の発祥地の一つとして、悠久な文化伝統を持っている。 イラクの両川流域(古代の人々はメソポタミアと呼んだ。)は、古代文化が創造された所である。かつて、イラク人民は豊かな原油資源を元手として物質経済的に裕福に暮らしてきた。

しかしイラクのサダム・フセインと軍部はアメリカに対抗す

る胆力と意志がなかったため、湾岸戦争以降帝国主義の横暴な要求に譲歩し続けながら軍事力を体系的に弱化させた。結局、アメリカ帝国主義の侵略によって国が滅び、人民は帝国主義の奴隷となった。

現実は銃剣、軍事力が弱ければ長い歴史的伝統や経済的潜在力をもっているにしても帝国主義の侵略と略奪の犠牲物、現代版植民地奴隷になってしまうということをはっきりと見せている。

朝鮮の諺に、国亡き民は喪家の犬にも劣るという言葉がある。この言葉は外来侵略者に国を奪われた人民は、人々の関心外にある喪家の犬よりも哀れであるという意味として、抑圧と搾取、さげすみと虐待の対象である亡国の民の悲惨な境遇と運命をさす言葉である。

この言葉の意味をイラク人民に強要された植民地奴隷の運命、人間以下の羞恥と蔑視、侮辱を通じて今一度考えてみる。

軍隊の運命はすなわち、党と国家、人民の運命である。

「わが党の先軍政治は、国と民族の自主権と尊厳を固守し、社会主義祖国の権威と威容を示すもっとも強力な政治方式です」

金 正 日

2. 軍事力強化の道

今まで、先軍革命の原理について解説した。

先軍革命の原理は、銃剣を基本にして人民大衆の自主性実現の根本的原理を明らかにしている。先軍革命の原理が科学的であるからといってそれがおのずと具現されるのではない。先軍革命原理を具現するには科学的な原則に依拠しなければならない。

先軍思想は、先軍革命の原理を明らかにしたことに基づいて自主と正義を守護し、富強・繁栄を実現するための根本方途、先軍革命原則についても明らかにしている。

では先軍革命の原則について一つ一つみることにしよう。

1) 軍事優先

金正日総書記は次のように述べている。

「幹部と勤労者はすべての活動を軍事優先の原則に立って行い、国の軍事的威力を強めるために極力努力しなければなりません」

歴史的に見れば、自主と正義、平和の守護に関する問題は、人類の運命と関連した重大な問題として、それについて

は論議も多くされてきた。それは搾取階級によって強要された侵略と戦争により世界的範囲で長い間、自主と正義がはなはだしく蹂躙され、平和な環境が破壊されてきたことと関連する。

資料によれば、B. C. 1496 年から A. D. 1861 年までの間に人類が比較的に平和な環境で生活したのは 227 年間であり、3130 年間は戦争を行ったという。

世界的に自主と正義、平和を守るための闘争は帝国主義が生まれてからもっと厳しく行われるようになった。帝国主義者にとって「戦争は流血の政治」、「政治は血を流さない戦争」となっている。

帝国主義の元凶であるアメリカは、建国してから 20 世紀の初めまで 114 回の侵略戦争を行った。

「太平洋もアジアも当然テキサス州とカリフォルニア州のようにアメリカの所有となるべきであり、そこの土着民も当然メキシコ人のように追い出すか、インディアンのように撲滅すべきである」

これが侵略と戦争の元凶、アメリカ帝国主義の論理である。

地球上に帝国主義が残存する限り、戦争は無くならない。

革命と建設では党を創建して国家政権を樹立し、経済建設を行うなど多くの問題が提起される。しかしいくら重要な事業であるといっても、革命の運命そのものを決する軍事ほど優先的な意義を持つ事業はない。

朝鮮では軍隊を先に組織し、その武力的保証のもとに革

命と建設を前進させる軍事優先の原則を固守してきた。

革命におけるすべての問題を朝鮮の現実の要請に基づいて独創的に解決してきた偉大な金日成主席は、1930年6月30日卡倫会議で銃を持って革命を行わなければ成らないという武装闘争の路線を打ち出し、1932年4月25日、反日人民遊撃隊を創建した。

反日人民遊撃隊は、不滅のチュチェ思想を指導指針とする真のチュチェ型の革命軍隊であった。反日人民遊撃隊は、人民の利益のためにたたかう真の人民の軍隊として当面には日帝侵略者を退けて民族的解放を達成し、ひいてはすべての階級的圧迫と搾取を一掃して、社会主義を建設することを目的とする革命武力であった。　反日人民遊撃隊は1934年に朝鮮人民革命軍と改編され、朝鮮人民の抗日革命闘争において指導的地位を占め、中核的な役割を果たしてきた。

こうしてつめ先まで武装した日本帝国主義を打ち破り、祖国解放の歴史的偉業を達成することができたのである。

主席は、革命武力に依拠して祖国解放の歴史的偉業を成し遂げ、その後、党も、国家も創建した。

解放後にも、革命の各時期、各段階において常に軍事活動に優先的な関心を払い、革命武力を絶えず強化して革命と建設の勝利的前進を軍事的に裏付けてきた。

1950年代、偉大な金日成主席が銃剣に依拠してアメリカとの祖国解放戦争で勝利を収めたことは人類史に刻まれる

軍事上の奇跡であった。

アメリカ帝国主義は、その時まで100回あまりの侵略戦争で一度も敗北したことがないと豪語する強敵であったし、年少な共和国にとってはあまりにも力に余る相手であった。アメリカに比べて朝鮮人民軍は正規武力に改編されてやっと2年しか経っていなかった。

しかし、朝鮮人民は自主性をめざす闘争でいつも銃剣を優先させてきた偉大な金日成主席の先見の明と卓越した軍事的知略、指導があったがゆえに、アメリカ帝国主義と追随諸国の侵略者に反対する戦争で勝利を収めることができたのである。

世界の進歩的人民がアメリカに下り坂への端緒を開いた朝鮮人民を英雄的人民と呼んでいるのには、鋼鉄の統帥者金日成主席の先軍業績にたいする称えもこめられている。

主席はその後、戦後復興建設と社会主義建設において一貫して銃重視、軍事重視路線を堅持し、自主、自立、自衛の最も優れた社会主義を立ち上げた。

その過程で人民軍はいかなる帝国主義の強敵をも打ち倒すことのできる無敵の強兵に強化され、自立的で近代的な国防工業が建設されるようになった。

また、経済建設と国防建設を並進させていくユニークな社会主義建設路線を始め、軍事を優先させていく社会主義建設の貴い経験が蓄積された。

朝鮮の経験は、国と民族の運命が銃剣、軍事にかかっているため、革命闘争では常に軍事を革命の第一位に置かなければならないということである。

帝国主義者が対話と協商、平和について喧伝し、相対的に情勢が緩和している時もありうるが、その時さえ軍事を第一位から第二位に置いたりしてはいけない。

軍事を優先させるということは、革命と建設で軍事だけに力を入れることを意味するのではない。

社会の発展は、政治、経済、文化など、各分野の発展を通してなされる。そのため、軍事を優先させながらも、社会の各分野を均衡的に発展させなければならない。

国防工業は重工業に基づいており、重工業の発展を抜きにして国防工業の発展を考えることはできない。国防工業で基本をなす兵器工業を見ても、それは言い換えれば機械工業である。金属工業や化学工業をはじめとする、重工業の他の部分の場合も同じである。詰まるところ、国防工業は現代工業の粋であり、集合体であるといえる。どの部門よりも高い科学技術を要し、生産設備と原料、資材に対する高い要求を提起する国防工業を優先的に発展させれば、科学技術と国の全般的工業の発展を力強く促すことができる。

それゆえ国防工業を優先させればその成果に基づいて軽工業と農業を同時に速やかに発展させていくことができるのである。

いつか偉大な金正日総書記が国防力を強化することと関連した書類にサインをする時のことである。

総書記は、ある幹部に人民が生活上困難をなめている時期にこういう決心をしなければならないから実に胸が痛い、こういうときが一番辛いと打ち明けた。

暫く痛い気持ちを抑えた総書記は低いが力のある声で、われわれが後で勝利の凱歌をあげるとき人民にみな話してあげよう、人民 は なぜ生活に困窮しなければならなかったかについて理解してくれるだろうと、言った。

苦難の行軍の時期、朝鮮人民は経済建設と人民生活において多くの困難と試練をなめた。原料難、動力難で工場が稼動せず、人民は食糧難で苦労をしていた。

しかし、総書記はこの難局を打開して革命を勝利へと導くためには軍事優先の原則を守らなければならないという信念を持って軍力の強化に最優先的な力を入れたのである。

軍事優先のこの道は、雨の日にも、雪の日にも、冷 た い風が吹いても行かなければならない道であった。

偉大な金正日総書記は、この軍事優先の道を歩みながら革命と建設を前進させてきた。

総書記が歩んだこの道があって、朝鮮革命の銃剣は日一日と強くなり、祖国繁栄の大道が開かれるようになった。

総書記がこの道で訪ねた単位は、一万 4296 ヶ所にものぼる。

偉大な生涯を閉じる時まで 16 万 7461 里あまりの強行軍の道を歩みながら、前代未聞の逆境の中で祖国と革命、社会主義を守り抜き、強盛国家建設の新しい歴史を開いたのである。

地球の周りが 4 万 55Km だとすると、総書記が歩んだ道のりは、地球の周りをほぼ 17 回も回った距離に匹敵する。

軍事活動に最優先的力を入れ、その優先的な解決を通じて革命と建設のすべての問題を解いていく軍事優先の原則を堅持してきたがゆえに朝鮮人民は、経済強国建設と人民生活の向上でも大きな前進をもたらすことができたのである。

銃剣を捉えていなければ一寸の前も見えないが、自衛の城郭の上では広々とした千年の未来が一目で見渡されるのである。

今日、朝鮮は、政治と経済、思想と文化のすべての領域で大きな変革を遂げている。この誇らしい現実は、軍事を優先させてこそ小さな国も大きな国に、世界的な強国の地位に上ることができるということを実証した。

2） 先軍後労

かつて社会主義を建設していた諸国では労働者階級を先頭に立たせ、それに依拠して革命と建設を行うことが一つの公式のようになっていた。これは先行したマルクス主義革命理論の要求であった。

マルクスは19世紀の中期に、発展した西側資本主義諸国の現実を反映して労働者階級が資本の支配とあらゆる搾取制度を一掃して社会主義、共産主義を実現する使命を担った最も先進的で革命的な階級であることを明らかにし、労働者階級を革命の主力部隊と規定した。

マルクスとエンゲルスは、著作「共産党宣言」でブルジョアジーに対立しているすべての階級の中で労働者階級だけが真に革命的な階級であるといいながら、彼らが資本に反対する闘争で失うものは鉄鎖であり得るものは全世界であるといった。当代の資本主義社会の現実を反映したこの理論は、その以降も一定の期間、労働者階級の革命闘争において肯定的な役割を果たした。パリ・コミューンが世に出現し、ロシアで社会主義10月革命が勝利した歴史的事実がこれを実証している。

社会主義偉業の遂行では労働者階級を中核として、主力部隊として革命闘争と建設を行うことがたがうことのできない一つの公式のようになっていた。

十年絶てば山河が変わるという言葉がある。この言葉はすべての事物は固定不変なのではなく、絶えず変化するという意味である。

マルクス主義革命理論が出現してから百数十年余り経っている。時代は遠く前進し、社会的環境も、階級関係も、労働者階級の境遇も大いに変わった。

資本主義が発展するにつれて、特に科学技術が高度に

発展し情報産業時代に入りながら、労働者階級の生活基盤も変わり、労働はより技術化、知能化されるようになった。労働者階級の隊列は知識人化されており、肉体労働に従事する労働者より、技術労働、知能労働に従事する勤労者が急激に増えている。

資本主義が発展するにつれて、独占資本の支配が強化され、反動的なブルジョア思想文化がより氾濫するようになり、これは労働者階級の階級的覚醒と意識化、革命化を抑制する作用をしている。

こういうことから、マルクスとエンゲルスが一世紀半の前に打ち出した理論と公式が今日には合わないようになった。

革命の主力部隊に関する問題はどの時代、どの社会でも、どの革命でも固定不変であるのではなく、階級関係に基づいてのみ解決される問題でもない。

革命の主力部隊を規定する基本尺度は、既存公式や慣例ではなく、現実である。

金正日総書記は既成の理論や公式にこだわることなく、朝鮮の現実から出発して人民軍を革命の主力部隊、国の柱として押し立てた。

金正日総書記は次のように述べている。

「先軍政治においては軍事が第一であり、軍隊が革命の中核部隊、主力部隊であり、軍隊を強化することが基本となります」

朝鮮で国の自主権と人民の生存権を守っている革命隊伍は人民軍である。

人民軍は帝国主義強敵と直接対抗し、社会主義と革命、人民の運命を銃剣でもって命を賭して守っている。

人民軍の銃剣、そこに平和もあり、社会主義の勝利もあり、人民の張り合いのある幸せな生活もある。

アメリカの軍事的侵略策動により、朝鮮半島は恒常的な緊張感が漂う世界最大のホット・スポットとなっている。アメリカ帝国主義は南朝鮮とその周辺に膨大な侵略武力を集結させながら絶えず北侵戦争騒動を起こしている。

アメリカ帝国主義が作成していた戦争計画がそれをよく物語っている。

1990 年代の「作戦計画 5027」、「作戦計画 5027－98」などはみな朝鮮に対する核先制打撃を具体化した侵略戦争計画であった。

新世紀に入って作成された戦争シナリオだけでも数え切れないほどである。「速戦即決の攻勢戦略」を具体化した「作戦計画 5027－04」、「北の攻撃力無力化」を目的とした「偶発的計画」、北の核施設に対する先制打撃を基本とする「新作戦計画 5026」、絶え間ない戦争演習と軍事的挑発により、誰かをいわゆる「動揺と崩壊へ誘導」すると言う「作戦計画 5030」、朝鮮を主な核先制攻撃の対象に決めた「核態勢検討報告書」、そして「作戦計画 5029－05」、「作戦計画 8022－

02」などがそのようなものである。

これらは、アメリカ帝国主義が新しい朝鮮戦争の導火線に火をつける機会だけを狙っていることを見せている。

強力な革命武力、無敵必勝の強兵に準備された人民軍は敵のいかなる侵略策動も断固と退けている。

人民軍はいかなる戦闘や不意の侵略戦争にも対応できるように、多様な戦法と戦術を備えており、自衛的核抑止力をはじめあらゆる攻撃手段と防御手段を揃えて国と民族の自主権を頼もしく守り抜いている。

人民軍の威力についてインド新聞「ジェイ・エム・ディ・バラット」には「朝鮮 に は世界最強の軍事力がある。鉄壁のような防御能力だけでなく、無比の攻撃能力も備えている。湾岸地域とバルカン半島で自らの気に触るからといって爆弾とミサイルをやたらに使っていたアメリカが、この国にたいしてはあえて手出しできずにいる理由がここにある」と書いた。

今日、人民軍の打撃には限界がなくその打撃を避ける所は地球上に無い。もし、戦争が起こればアメリカとその追随勢力は徹底的に消滅されるであろう。

それゆえ朝鮮の気概を挫けようと挑発を仕掛けてきたアメリカ帝国主義は、毎度人民軍の威力に恐れをなして後退してしまった。

朝鮮の現実はアメリカに対する恐怖感をなくし、アメリカの力の行使には力で対抗しなければならないということを物語

っている。戦争を望まないからといって、それを恐れてはいけない。

歴史的にみても帝国主義は人類に平和をプレゼントした例が無い。帝国主義は自らの侵略的本性を絶対に捨てない。死ぬ時まで他国と他民族に対する侵略と支配をこととするのが帝国主義の生存方式、本業である。

帝国主義とは闘うしか道が無く、それを通じてのみ国と民族の自主権と尊厳を守りぬき、平和と繁栄を遂げていくことができる。

ある歴史家はこう言っている。

「平和を願うならば、戦争に準備されなければならない」

至極正当な言葉である。先軍によって固められた軍事的威力があったがゆえに、世界最大のホット・スポットである朝鮮半島で平和と安全が保障されているのである。

人民軍の威力は単に反帝軍事戦線だけでなく、革命と建設のすべての分野において高く発揮されている。

もっとも厳しかった去る苦難の行軍、強行軍の時期に人民軍は、祖国防衛の任務を立派に遂行しながらも、創造と建設の先頭に立って英雄的偉勲を立てた。

人民軍は「祖国の防衛も社会主義建設もわれわれが引き受けよう！」というスローガンを掲げて、革命的軍人精神で社会主義建設の困難で骨の折れる部門で突破口を開いた。

金正日総書記は1997年10月23日、国の大動力基地

である北昌(ブクチャン)火力発電連合企業所の電力生産を高めるために人民軍を派遣した。

当時の緊張した電力問題を解決するには決定的に火力発電所の電力生産を盛り立てなければならなかった。特に北昌火力発電連合企業所の電力生産を高めることが重要な問題として提起されていた。

現地へ向かった人民軍軍人は、各炭鉱と坑道を受け持って、石炭の生産と輸送を競争的に行った。彼らは一身がそのまま削岩機となり爆薬となって掘進を保障し、炭運搬車が保障されるのを座って待っていたのではなく、石炭を背負って坑外に運搬した。闘争の日々に得られた一gの石炭、一wの電力には、骨の折れる各部門で進撃の突破口を切り開いた人民軍軍人の貴重な血と汗がこもっている。

こうした激しい闘争の中で石炭生産が日一日と上がり、当年の末には企業所の電力生産がはるかに高まるようになった。

電力問題を解決するための人民軍軍人の偉勲は全国の各所に立ち上がった1000あまりの中小水力発電所が物語っている。

清流橋(2 段階)、錦陵第二トンネル、平壌—香山間の観光道路、安辺青年発電所(1, 2 段階)、泰川 5 号発電所など各所の発電所の建設、正方山と九月山を人民の文化的休息の場として作り変える工事、竜門大窟工事、檀君陵改築工事、4.25 旅館建設、黄州養鶏工場建設、江原道と平安北道の

耕地整理…これらは 1995 年から 2000 年までの間に人民軍軍人が建設した対象の一部に過ぎない。

それゆえ、ある外信は「今、北朝鮮のすべての様相は、金正日最高司令官の軍唯一中心のユニークな政治によるものである。軍隊はこの国の社会主義政治実体を守る強力な主力部隊となっているだけでなく、北朝鮮が直面したすべての経済的難関を解決していく、言葉通りの最高司令官の突撃隊、主力部隊として活動している」と伝えている。

最も強い革命性と組織性、戦闘力を持つ革命的集団であるがゆえに、人民軍は革命と建設において中核的地位を占めて主導的役割を果たす革命の主力部隊となるのである。

「強力な革命武力があってこそ、革命で勝利し、勝利した革命を守り、国と民族の運命を自主的に切り開いていくことができるのです」

金 正 日

3.　現時代の有力な政治方式－先軍

政治は国と民族の富強・繁栄、その前途を左右する上で決定的役割を果たす。どういう政治が実施されるかによってそれぞれの国と民族が繁栄の道を歩むこともあれば、風波をなめ、死滅することもありうる。

先軍政治はその概念でも分かるように、軍事を優先させる政治、政治と軍事が結合された政治である。

もしかするとこう考えるかも知れない。軍事を優先させる政治、政治と軍事が結合された政治は、先軍政治で初めてなのか、と。

人類の政治史を振り返れば、政治と軍事は密接に連関しており、それらの結合は先軍政治で始まったのではない。

古代のスパルタ国家でのように最初から軍事で社会管理をした政治もあった。20 世紀、一部の国でのように軍事クーデターで政権を転覆させ、すべての政治組織の上に軍隊を置き、軍部の要求と利益に即してすべての社会生活を組織し管理した軍権政治もあった。

しかしスパルタ国家は、社会発展の停滞によりその存在を維持することができずに歴史の舞台から消えてしまい、軍部が国家社会生活を意のままに牛耳っていた軍事独裁も民

主主義の潮流に押し流されてしまった。

それは搾取社会での軍事政権、強権政治が人民大衆の自主性を無残に踏みにじり、他国への侵略と略奪をこととする反動的な政治であったからである。

先軍政治は、人民大衆の運命を守ってくれる政治である。

政治も人民のための政治、軍事も人民のための軍事である。

人民のための軍事を人民のための政治と密接に結合させた政治がほかならぬ先軍政治である。

その先軍政治について具体的に見ることにしよう。

1） 対決か、屈従か

1990 年代中期、朝鮮の情勢は極めて厳しく複雑であった。

東西間の冷戦のシンボルであったベルリンの壁が1989年11月に崩れ、その後、東欧諸国で社会主義が相ついで挫折し資本主義が復活するような大政治波動が起こった。

こうなるや、アメリカは「唯一超大国」と自称しながら、自らが主導する「新しい世界秩序」の樹立を主要戦略的目標として押し立てた。

1991 年 1 月、当時アメリカ大統領であったブッシュ 1 世は国会での演説で、「長い間願ってきた新しい世界秩序を樹立しうる機会」が到来した、冷戦の脅威がなく市場と民主主義が繁盛する世界秩序を打ち立てると言った。

アメリカは自らが主導する一極世界を打ち立てる上で、朝鮮を最も大きな障害とみなし、対共和国圧殺策動を悪辣に行った。アメリカ帝国主義の狂乱的な孤立圧殺策動は、軍事力に依拠した侵略と戦争挑発を基本にし、政治、経済、思想文化など各分野にわたって行われた。

アメリカ帝国主義は冷戦の終息後、自らの侵略武力をヨーロッパから朝鮮半島、その周辺へと移動展開し、南朝鮮駐屯米軍の近代化に狂奔した。

アメリカ帝国主義の軍事演習は年中、年々と続き、とりわけ朝鮮人民が最大の痛恨事に見舞われたことを奇貨として共和国に対する圧殺策動はより強化された。朝鮮人民が偉大な金日成主席と告別式を行う 1994 年 7 月 19 日にも、アメリカ帝国主義は太平洋艦隊の飛行機を出動させ、南朝鮮地域の上空を作戦舞台にして挑発的な「空中打撃演習」を行った。

1995 年には、「フォール・イーグル」合同軍事演習に南朝鮮駐屯アメリカ軍だけでなく、多くの海外侵略武力まで投入した。

1996 年には南朝鮮で「フォール・イーグル」、「ウルチ・フォーカス・レンズ」、「ホグク 96」、「アル・エス・オ・アイ」、「ファラン」、「フリーダム・バナー」など、各種の挑発的北侵戦争演習を行った。これは戦争前夜にのみ見られることとして、共和国に対するアメリカ帝国主義とその手先どもの無謀な戦争狂気をそのまま見せるものであった。

アメリカ帝国主義は思想的・文化的浸透策動も狡猾に行った。

そもそも社会主義諸国に対する思想的・文化的浸透はアメリカ帝国主義の世界制覇戦略の重要な一手段であった。

歴史的にアメリカ帝国主義の支配主義的策動は主に二つの方向で行われてきたが、一つは他国を軍事的に侵略することであり、もう一つは思想的・文化的浸透で瓦解させることであった。

アメリカ帝国主義は「100 機の爆撃機ができないことを 10 名の『使徒』にはできる」といいながら、朝鮮を瓦解させようと執拗に策動してきた。1949 年に創設された「自由ヨーロッパ放送」を通じて社会主義諸国の崩壊をもたらしたことに自信を得たアメリカ帝国主義は、朝鮮を崩壊させるための「自由アジア放送」にしがみついた。1996 年に放送を開始して 1997 年からは直接朝鮮を狙って放送をし始め、その費用だけでも毎年1千万ドルを支出してきた。

帝国主義者の経済制裁と封じ込め策動もまた悪辣であった。

従来、対外貿易においてほとんど社会主義市場に依拠して来た朝鮮は、東欧社会主義諸国の崩壊により、原油、コークス炭をはじめとする必要な原料、燃料、資材の購入が難しくなった。これをいいチャンスとしたアメリカ帝国主義は、共和国を経済的に窒息させるために全面的封じ込め政策を実施するに向かった。そして「ワッセナー協約」(社会主義諸国に対

する輸出統制機構であったココムの後身)をはじめ、各種の手段と方法を使って、共和国に対する経済的封じ込めをさらに強めた。

それに朝鮮人民は、民族最大の痛恨事の後、暴雨と日照り、台風と津波による自然災害を連続的に被り、生活上大きな打撃を受けた。

1990 年代にかもし出された情勢により朝鮮は言葉通り最悪の状況にあった。帝国主義者は包囲環を形成し各方面で圧力を加えた。敵は最後まで朝鮮が降伏することを待ちながらあらゆる方法と手段を尽くした。

対決か、それとも従属か、朝鮮人民と人民軍は岐路に立っていた。

前者は自主権と尊厳を守る勝利の道、栄光の道であった。しかし、この道は帝国主義強敵を退けて度重なる難関と試練を克服していかなければならない、犠牲を伴う困難な闘争の道であった。この道は帝国主義者に頭を下げて奴隷として生きるのではなく自らの尊厳を守り、堂々と歴史の試練を乗り越えていく、自主の道、信念の道であった。後者は帝国主義の奴隷として苦痛と悲しみを強要される従属の道、亡国の道であった。朝鮮人民は軍力が弱かったため 20 世紀の初め、日本帝国主義に国を奪われ、奴隷の悲惨な運命を強いられた胸の痛い過去を持っている。奴隷になって見なかった国の人民はその生活がいかに辛いものであるかを知らないであろう。

そういう奴隷のような生活を朝鮮人民は 40 年余りも強要された。この期間に日本帝国主義は、840 万名以上の朝鮮人を侵略戦争遂行のために徴兵、徴用で強制に連行し、20 万名の朝鮮女性を拉致して日本軍の性奴隷にするなど、前代未聞の反人倫的罪悪を犯した。朝鮮の天然資源を無制限に略奪しただけでなく、はなはだしくは「同祖同根」、「内鮮一体」を云々しながら朝鮮の言葉と文字を無くし、朝鮮人民の魂を去勢しようと悪辣に策動した。

朝鮮人民は日本帝国主義を打ち倒して祖国を解放するための血みどろの戦いを数十年余り行い、国の解放を達成した。

これは朝鮮の人民と人民軍に銃剣、軍事力が弱ければ帝国主義の奴隷になるということ、亡国は一瞬であり復国は千年であるということを胸深く刻み込ませた。

朝鮮が生き残る道、勝利する道はひとえに帝国主義者に屈服する道ではなく、彼らの強権と専横に力で、銃剣で持って断固と立ち向かう道であった。

これを胸に刻み込んだ朝鮮の人民と軍隊は、帝国主義の奴隷になることを絶対に許さず、最悪の状況下でも敵との生死を分かつ対決戦に奮起したのである。

偉大な金正日総書記は朝鮮の人民と軍隊のこうした信念と意志を反映して自主的人民、自主的近衛兵としての尊厳と誉れを固守する道を選んだのである。

1995 年 1 月 1 日、金正日総書記は、小松林の茂ってい

るある人民軍区分隊にたいする現地視察を行った。中隊に到着し、新年を迎える兵士たちを祝賀して彼らの火器操作訓練も見た総書記は、教育室と兵室まで一々見回りながら区分隊の思想教育活動と物質文化生活全般を具体的に調べ、人民軍を政治的・思想的によりしっかりと武装させ、戦闘準備と軍人生活を改善する上で提起される具体的な課題と方途を提示した。

小松林の軍営にたいする視察をしたその日の夕べ、金正日総書記は党と国家、軍隊の責任幹部に革命闘争において基本は銃剣である、軍隊が弱ければ敵の反革命的攻勢を打ち破ることができず、一朝にして崩壊しうる、帝国主義者と反動勢力はいかなる世界的動乱の中でも微動だにせず、社会主義の旗を高く掲げて前進しつつあるわが国を圧殺しようとあらゆる策を弄している、人民軍さえ強ければ恐れることはない、敵が敢てわれわれに手出しできずにいるのも人民軍が強いからであると確信に満ちて言った。

偉大な総書記の小松林の軍営に対する現地視察は、先軍政治の全面的開始を知らせる歴史的宣言であった。

この視察は、先軍政治を新しい高い段階で全面的に実現していく上で根本的転換の契機となった。

2） 軍事を第一の国事とし、軍隊を主力部隊として

金正日総書記は次のように述べている。

「わが党の先軍革命指導、先軍政治は、軍事を第一の国事とし、人民軍の革命的気質と戦闘力によって祖国と革命、社会主義を守り、社会主義建設全般を力強く推し進める革命指導方式であり、社会主義政治方式です」

先軍政治は本質において軍事優先の原則で人民大衆の自主偉業の遂行で提起されるすべての問題を解決し、軍隊を革命の柱として押し立て、それに依拠して自主偉業全般を進めていく政治方式である。

軍事を第一の国事にするということは先軍政治の本質的一側面をなしている。

政治は社会生活全般を包括する活動であり、膨大でかつ多様な問題が政策の樹立とその実行の対象となる。

この中で軍事活動と関連した問題、国防力を打ち固める上で提起される問題を国と民族の運命を左右する最も重大な問題とみなし、その解決に大きな力を入れるというのが先軍政治である。

軍事は軍隊と国防工業、戦争など国の防衛と関連したすべての分野を包括する国家社会生活の一領域である。

軍隊の組織と強化、発展といった軍建設、軍隊の訓練や

戦争のような軍事活動、武装装備の生産と関連した国防工業、作戦及び戦略物資の保障と関連した、軍需生産、民間武力の準備、陣地や坑道、軍事施設の構築など、軍隊と国防力の強化に必要なすべての活動が軍事に含まれる。

一見すると、軍事は人々が生きていく問題とは距離があるように考えられる。衣、食、住の問題を解決する経済をはじめとする他の分野がもっと切実に考えられたりもする。

しかし決してそうではない。軍事は国家社会生活のどの分野よりも人々の生活と根本的に、直接的に結びついていると言える。

基礎がしっかりとしてこそ建物も大きく作ることができ、地震や台風にも耐えられるように、国と民族も軍事力が強くてこそ安定した環境と状況の下で経済と文化を持続的に、速やかに発展させることができる。

先軍政治はこういうところから、軍隊を強化することを軍事の基本に押し立て、革命武力の政治的・思想的優位性と戦略戦術的及び軍事技術的威力を最大限に高め、強力な国防工業の建設、発展に大きな力を注ぐのである。軍事力が弱くて国と民族が外部勢力に蹂躙されれば、民族の全構成員は羞恥と侮辱、苦痛と不幸を逃れることができない。これはアメリカ帝国主義のグレナダー侵攻を見てもよくわかる。

グレナダーの人民は 1979 年 3 月に、親米独裁政権を覆して人民革命政府を樹立した。革命政府は産業を国有化し

てすべての天然資源を国家の手中に掌握し、土地改革と男女平等権などを実施した。

久しい以前から侵略の野望を抱いてきたアメリカ帝国主義は、1983年10月25日、70あまりの飛行機を搭載した空母をはじめ、11隻の軍艦の掩護の下、2000余名のアメリカ侵略軍をグレナダーに侵入させた。

約11万名の人口しかない小さな島の国であるグレナダーを占領したアメリカ侵略軍は、数多くの愛国者と無辜の住民たちを虐殺し、2000名の愛国者を監獄に入れた。

アメリカ帝国主義はこの国に傀儡政府をでっち上げ、以前に革命政府が作っておいたすべての国家法律を廃止し、グレナダー人民のすべての民主主義的自由と権利を踏みにじってしまった。

グレナダーに対する武力侵攻は、アメリカこそ最も凶悪な侵略者であることを赤裸々と見せた。

これも銃剣を強化しなかったところから招来された悲惨な結果であった。

自分の気に触り、自分の言うことを従順に聞かない国に対しては圧力を加えて政権を転覆させるのが、国際憲兵のように振舞うアメリカ帝国主義の常套的手法なのである。

現実は軍事こそ、国と民族の運命、ひいては個別的人間の運命までも左右する重要な事業であることをはっきりと見せている。

先軍政治はこうした真理に忠実であり、それを徹底的に具現する政治、言い換えれば軍事を国事中の第一の国事とし、軍力の強化に最も優先的な力を入れる政治である。

先軍政治の本質のもう一つの側面は、革命軍隊を中核、主力とする政治方式であるということである。

先軍政治が革命軍隊を中核、主力部隊に押し立てるということは、軍隊を掌握し、軍隊をモデル集団として祖国と革命、社会主義を守り、その先導的役割を高めて社会主義建設を積極的に推進していくことを意味する。

先軍政治は人民軍の革命的気質と戦闘力に依拠して祖国と革命、社会主義を守る。

歴史的に支配階級、搾取階級は軍隊を支配と抑圧、殺戮と略奪の道具に使いながら、その侵略性と野蛮性を培ってきた。

今もアメリカ侵略軍に入隊する兵士に与えるパンフレットの第 1 ページには、「あなたたちは、無慈悲で有能な殺人者になるべきである」と書かれてあり、「兵士とは何か」というところには「国家はあなたのために 3 万ドルを支払っている。……あなたは自分に与えられた人間を殺すことでこれを補償することができる」と書かれてある。

アフガニスタン、パキスタンの国境地帯で敢行され、今も続いているアメリカ軍の殺戮蛮行は、まさにこうした非人間さ、反人民性こそは帝国主義反動軍隊の隠せない本性であり、

本態であることを如実に見せている。

　人民大衆の解放偉業に服務する労働者階級の革命軍隊はこれとはまったく異なる。

　革命軍隊だからといって単に革命に参加する軍隊や社会主義国家の軍隊を意味するのではない。社会主義国家の軍隊であっても正しい政治的指導を受けていないと、革命性と組織性、団結力と戦闘力を失い、すでに得た社会主義の獲得物も守り抜けず、反革命の道具として利用される。革命軍隊はひとえに党と領袖の指導を受けてこそ、生まれることもでき、自分の使命を全うすることもできる。

　こうした革命軍隊を育成し、その革命的気質と戦闘力に依拠して祖国と革命、社会主義を守る政治がほかならぬ先軍政治である。

　アメリカ帝国主義の軍事的企図をそのつど打ち破っている人民軍の姿は、先軍政治こそ祖国と革命、社会主義偉業を徹底的に守りうる有力な武器であることを見せている。

　人民軍は1994年12月、領空を侵した米軍の最新鋭偵察ヘリコプターを一発目に撃墜させた。そして 2003 年の初め、朝鮮東海の上空で軍事偵察行為をしている「RC-135」米軍偵察機に戦闘機で出向い近接制圧することにより、あたふたと逃げさせたことなどは、朝鮮が決して空論を言わないということを実践で見せた。

　先軍政治は、人民軍を先頭に立たせて社会主義建設全

般を進めていく。

朝鮮の随所に近代的な家禽牧場と養豚工場、基礎食品工場を建設しているのも人民軍であり、七宝山と九月山、竜門大窟とウリム滝をはじめ、名勝地を勤労者の文化的休息の場として作り変えているのも人民軍である。

最近は、人民の文化・情緒生活に必要な劇場、映画館、食堂と民俗公園まで人民軍が受け持って最上の水準で建設している。これを通じても、人民軍が社会主義経済建設に積極的に参加して、先鋒隊、突撃隊としての役割を全うしていることがわかる。

軍事と関連しては昔から「千日養兵、一日用兵」と言った。これは軍隊育成の重要性を強調すると同時に、軍隊は戦争と戦闘の時しか使うことがないと言う意味もある。しかし朝鮮では人民軍が祖国と革命、社会主義を生命を賭して守るだけでなく、人民大衆の福祉のための活動まで受け持って遂行する万能の軍隊である。

人民軍を革命の最も頼もしい中核勢力、前衛部隊に押し立て、それに依拠して社会主義を守り、経済建設も進めながら人民の幸せを創造していくのだから、これこそ「用兵万事」と言って正しいであろう。

先軍政治は人民軍を社会主義建設のすべての部門で先頭に立たせ、先鋒隊、突撃隊としての役割を果たせることにより、すべての勤労者が学び、体得すべき崇高な思想的・精

神的品格と戦闘力のモデルを創造した。

社会の全構成員が人民軍の思想観点と闘争気風、生活方式を見習い、非常な精神力を発揮するようにして、経済と文化、科学と教育、スポーツと芸術をはじめとする全般的社会生活分野において急速な発展と変革を遂げていくようにする。

最近、朝鮮で行われている最先端突破戦がこれを見せている。

最先端突破戦は、CNC 技術の覇権を握った経験に基づいてすべての分野で世界が到達した科学技術水準を最短期間内に飛び越し、知識経済時代に合う経済強国を建設するための壮大な活動である。「最先端を突破せよ！」というモットを掲げて、すべての部門、単位で最先端突破戦を力強く展開し、成果を挙げている。

チョンリマ製鋼連合企業所では、自力で超高電力電気炉を数ヶ月間で立ち上げ、鋼鉄の生産を現代化した。朝鮮では21世紀のモデル工場がたくさん建てられて、標準型3軸、4軸 CNC 工作機械はもちろんでクランク軸研磨盤、9 軸旋削加工中心盤、11 軸複合加工中心盤など最先端 CNC 設備を自由に作り出すようになった。

これらの成果は全的に、人民軍をモデルにして人々の精神力を高め、軍隊と人民の創造力に依拠して社会主義建設を進めていく、先軍政治方式によってもたらされたものである。

3）偉大な時代精神

時代精神はその時代を象徴し、代表する革命精神である。時代精神は時代と生活の基本志向を反映し、当該時代の革命と建設を力強く推進する。

朝鮮革命の歴史を振り返れば、その開拓期から今日に至るまでの各時期や段階には、その時代を代表する革命精神が記録されてきた。

抗日革命闘争は、国家的後方や正規軍の支援もなしにすべてを自らの力で解決しながら日本帝国主義を打ち破り祖国解放の偉業を実現しなければならない厳しい闘争であった。

祖国と民族の運命が生死岐路に置かれていた受難の時期、抗日革命烈士たちは白頭の革命精神を高く発揮した。

白頭の革命精神があったがゆえに彼らは、偉大な金日成主席の指導の下にあらゆる試練と難関を果敢に克服しながら血みどろの闘争を展開し、ついには日本帝国主義を打ち破って祖国解放の歴史的偉業を実現することができたのである。

1950 年代は、朝鮮民族の運命を決する厳しい試練の年代であった。この時期に朝鮮人民は祖国の運命を守るための戦争を行った。そして戦争によって甚だしく破壊された都

市と農村、工場を復旧し、農村経理と都市の個人商工業を社会主義的に改造する社会主義革命も遂行した。また、国と民族の繁栄のための自立的経済の土台も築かなければならなかった。これらのすべての闘争はアメリカ帝国主義をはじめとする内外の敵との熾烈な階級闘争を伴う困難な闘争であった。

この時期に朝鮮人民は領袖決死擁護精神、祖国守護精神、百折不撓の闘争精神を基本とする1950年代の闘争精神を高く発揮した。朝鮮人民は解放後 5 年間の張り合いのある幸せな生活を通じて、金日成主席の懐はすなわち祖国の懐であり、祖国を失えば再び奴隷になるということを胸に深く刻み込んだのである。それゆえ朝鮮人民は金日成主席がいれば必ず勝つという必勝の信念を持って山岳のように奮い立ち、アメリカ帝国主義を打ち倒して祖国を守り通し、あらゆる難関と試練を乗り越えて社会主義的改造を完成し、経済的土台をしっかりと打ち固めた。

1970 年代は朝鮮革命の発展において画期的な転換がもたらされた時期であった。

朝鮮人民はこの時期に、チュチェ革命偉業を立派に継承完成するためのたたかいを力強く展開した。朝鮮人民は金正日総書記に対する絶対的崇拝心を持って、総書記を党と革命の首位に頂き、その指導を忠実に奉じた。こうして 1970 年代に党の唯一思想体系と唯一的指導体系が確立され、社会主義の大建設で大きな飛躍が起こったのである。

これもその時期に発揮された時代精神を抜きにして考えることができない。

白頭の革命精神、1950年代の闘争精神、1970年代の闘争精神をはじめ、革命的な時代精神がみなぎる中で朝鮮革命の継続的前進と勝利的な発展がもたらされたのである。

時代の要求にふさわしく人民大衆を呼びかけることにより時代精神が革命と建設で果たす役割はきわめて大きい。

現在、朝鮮人民を大いに励ましている時代精神は、革命的軍人精神である。

金正日総書記は次のように述べている。

「党の指導のもとで人民軍に生まれ、強く発揮されている革命的軍人精神は、領袖決死擁護の精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神を基本とするわが軍隊の高潔な革命精神です」

革命的軍人精神という時、先に考えるのは、安辺青年発電所の建設現場である。それはもっとも困難であった苦難の行軍の時期、安辺青年発電所で革命的軍人精神が創造されたからである。

安辺青年発電所の建設工事は、江原道一帯の電力問題を解決しようという金日成主席の大自然改造の構想によって設計され推進されてきた工事として、広い地域の河川を一筋に集めて大量の電力を生産するための膨大で難儀な工事であった。

初歩的に計算しただけでも、主要工事の一つである水路トンネルの掘削量が総じて数 100 万m^3に達し、多くのコンクリート混合物、数 10 万 t の木材と鋼材、爆薬が必要であった。

西側で数 10 億ドルが投資されたであろうと算出した西海閘門の総体的工事量の 2 倍も超える、実に膨大な工事であった。貯水池のダムを建設するところの地質構造が極めて複雑で条件が不利であったため、土木技術が発達しているという国の技術者までも「到底、可能でない無謀な工事」であるとまで言ったぐらいであった。

敵もこの工事を「紙上の発電所」だの、何だのと、あらゆる悪宣伝を吹きまわす一方、手段と方法を分かたずに工事を破綻させようと悪辣に策動した。

総書記は、いかなることがあっても屈指の大型水力発電所を立ち上げる決心を固め、膨大で難儀な建設工事の任務を人民軍に与えた。

人民軍軍人は総書記の命令を貫徹する上では不可能がありえず、無条件徹底的に遂行しなければならないという信念と意志を持って建設戦闘に奮い立った。彼らは「敬愛する最高司令官の命令を貫徹するまでは祖国の青い空を仰ぐな！」というスローガンの下に、肉弾となって水路トンネルを掘った。すべての指揮官が 「突撃、前へ！」ではなく「わたしに続け！」という号令をかけながら危険な崩落区間も克服し、兵士たちは一番骨の折れる仕事を自分に任せてくれといいながら献身

的に働いた。

輸送を受け持った軍人たちは「任された輸送任務を果たす前には部隊に帰るな！」と言いながら海抜 670mもなる険しい峠を運行し、山道、坂道を走りながら物資を運んだ。

またこういうこともあった。

ある川を横切るトンネルの掘進中、貫通 10mを前にして急に水の穴ができ、川の水が滝のように入って瞬時に坑道は水に浸るようになった。

一部の人は今からでも掘進の方向を直そう、トンネルを二つに分けて発電所を別々に建設するのが上策ではないかと主張もした。しかし、軍人たちはそうは行かない、大型の水路トンネルを作るのは金日成主席と金正日総書記の命令であり、水路トンネルの位置も主席が直接定めている、党の命令を貫徹するうえで迂回などありえない、無条件にその通りすべきであると言いながら、渦巻く坑内の水の中に飛び込んで穴を塞ぎ、昼夜なく熾烈な闘いを行ってみんな水を汲み上げ、掘進を続けたのである。

領袖決死擁護精神、決死貫徹の精神、英雄的犠牲精神は、安辺青年発電所建設現場のどこでも高く発揮された。

こうした信念と決死の覚悟で戦ったため、軍人建設者たちは困難な作業条件の中でも、膨大な水路トンネルと高く聳え立つダム、大きな取水口など、壮大な構造物を建設することができたのである。1996 年6 月 10 日、偉大な金正日総書記は

人民軍軍人の英雄的闘争によって完工段階に入った安辺青年発電所を訪ねた。降り注ぐ雨も気にせず人民軍軍人が建設したダムと取水口など地上の構造物と大型水路トンネルをみな見回った総書記は、わが軍人たちが偉大な奇跡を創造した、万難を乗り越えて私の命令を最後まで貫徹した、これがほかならぬ人民軍の革命的軍人精神であると言った。革命的軍人精神はこのように生まれた。

朝鮮では社会の全構成員が革命的軍人精神に見習って活動と生活に具現している。

革命的軍人精神には、社会の全構成員が担うべき思想的・精神的品格が完璧にこめられている。透徹した領袖決死擁護精神と決死貫徹の精神、崇高な犠牲精神と大衆的英雄主義、自力更生、刻苦奮闘の革命精神、熱烈な祖国愛と人民愛、革命的同志愛、まさにこれが革命的軍人精神にこめられている思想的・精神的品格である。

人民軍で創造された革命的軍人精神を社会でも見習うことにより、軍隊と人民の思想の一致、闘争気風の一致が実現され、朝鮮人民の政治的・思想的品格は見違えるほど変わった。

人民軍のような透徹とした領袖決死擁護精神で党と領袖を奉じ、人民軍のような決死貫徹の気風で任せられた任務を遂行している。文化・情緒生活も人民軍のように戦闘的かつ楽天的にやっている。

朝鮮人民が社会主義制度を守り、強盛国家建設を早め

るためのたたかいに奮い立ち、無比の勇敢さを発揮しているのも、この革命的軍人精神に見習っているからである。

革命的軍人精神が創造され一般化される過程はすなわち、先軍政治を全面的に確立して具現していく過程となった。こうして革命的軍人精神の創造と一般化は、先軍政治の歴史に一つの画期的な里程標となった。

4）強固な3大柱

強固な建物は、強固な柱に支えられている。柱が強固であってこそ、いかなる風波にも揺れない強固な生活のよりどころが保障される。

政治の柱は、それを支える政治的勢力である。強固な政治的勢力に依拠する政治は自分の目的を最後まで実現していくが、そうでなければ歴史の試練と難関の前で尻込みし、所期の目的を実現できずに終わってしまう。

先軍政治が歴史に類のない試練の中でも動揺することなく自らの正義の目的を主導的に、最も活気に満ちて実現させているのは、この強固な柱、強力な政治的勢力に依拠しているからである。

先軍政治は革命的党と革命武力、一心団結の3大革命勢力をその柱としている。

朝鮮に行けば、TV と放送で出る歌「高く靡け、わが党旗よ」

の曲調をよく耳にするようになる。

この歌を牡丹峰楽団など有名な芸術団体で形象して歌っているが、朝鮮人民は大変愛唱している。歌では朝鮮人民のすべての勝利の組織者であり導き手である朝鮮労働党の偉大さをたたえている。

朝鮮革命は朝鮮労働党の指導のもとで難関と試練を乗り越え、勝利一途をたどることができた。

先軍政治も同じである。先軍政治はあくまでも朝鮮労働党の政治であり、先軍革命指導は朝鮮労働党の指導である。

朝鮮労働党は先軍政治実現の第一の柱、中枢的勢力である。

金正日総書記は次のように述べている。

「**党の指導は人民軍の生命です**」

先軍政治では軍隊が革命と建設の中核部隊、前衛部隊である。だからといって、政治の実現で軍隊が党より上位にいるとか、党の役割を代行できると考えてはいけない。軍隊も党の指導を受けてこそ革命軍隊になりえ、革命闘争で自らの使命と革命的責務を全うすることができる。

一般的に政治の実現には党だけでなく、国家政権と勤労団体、革命武力など社会の各政治的勢力が参加するようになる。これらの勢力を指導しうる政治組織は党以外にない。

朝鮮労働党は先軍政治の実現で指導的地位を占め、指導的役割を果たしている。

敬愛する金正恩同志を最高の首位にいただいた朝鮮労働党は先軍の旗を高く掲げ、千万の軍民をチュチェ革命偉業の遂行へと力強く組織動員する、指導的政治組織である。

朝鮮労働党は先軍思想に基づいて銃剣を優先させる革命路線を提示し、国家政権を始めとしてすべての政治組織が先軍の原則で自分の活動を行っていくよう党的に指導する。

また人民軍軍人をはじめとする社会の全構成員を領袖の周りに固く団結させ、先軍政治の実現へと力強く組織、動員している。それにより人民軍は、党の軍隊、領袖の軍隊として、その偉業を先頭に立って奉じていく革命の強力な主力部隊となっている。

2010 年 10 月 10 日、金日成広場では金正日総書記と金正恩同志の参席の下に、朝鮮労働党創建 65 周年慶祝閲兵式が盛大に行われた。閲兵式では、朝鮮人民軍、朝鮮人民内務軍、労農赤衛軍の閲兵縦隊が歩武堂々と前進し、その後を追って最新型の砲、装甲車、戦車の縦隊、放射砲縦隊、ミサイル縦隊など、邀撃ミサイル総合体が幹部団の前を通った。それを見ながら朝鮮人民は、朝鮮労働党の賢明な指導の下にいかなる強敵をも一撃の下に打ち破る、攻撃手段と防御手段を整えた、白頭山革命強兵の威力を実感し、同時に党の先軍政治を奉じてチュチェ革命偉業の代を最後まで完遂していく信念と意志を固めた。

朝鮮労働党の賢明な指導の下に日増しに強化されてい

る先軍の威力が教える真理は、党の指導を受けていない銃剣は、革命闘争において棒切れよりも役に立たないということである。

朝鮮のように党と軍隊が密着している国はなく、人民軍のように党に忠実な革命的武装力はない。それゆえ、朝鮮人民は命を捨てることがあっても永遠にチュチェの党旗を手放さないと、声も高く歌っているのである。

先軍政治を支える柱は、次に不敗の人民軍である。

人民軍が先軍政治を支える柱だというのは、人民軍が先軍政治の実現を確固と裏づけ先頭で奉じていく有力な政治的勢力であるからである。

人民軍は祖国と革命を銃剣で守る武装隊伍として、党と領袖を擁護するうえで誰よりも徹底的であり、敵の策動から党と領袖を命を賭して決死擁護する。朝鮮革命の万年の財貨である革命的スローガンが記された樹木を守って一身をささげた 17 名の共和国英雄たちの偉勲には、人民軍の透徹とした領袖決死擁護精神がそのまま反映されている。

恐ろしい炎と戦っていた所のすぐ下には、下へと流れる小川があった。転がり落ちれば瞬間で着くことのできる小川であったが、17 名の兵士たちは約束でもしたかのようにためらいなく火の中に身を投じた。

炎の中では「最後まで守ろう！」、「決死擁護しよう！」という信念の声が高く響いた。炎は 17 名の全身を焼けることはできても、彼らの胸に抱かれた領袖決死擁護精神は焼けること

ができなかった。

火にも焼けずいかなる逆境の中でも揺れない領袖決死擁護精神を信念として、信義として体現している真の人間たちがこのような人民軍軍人である。

人民軍は党と領袖の思想と路線を貫徹する上で最も戦闘力のある前衛隊伍である。

人民軍は党と領袖の命令なら水火をもいとわず、自分の生命もためらいなくささげて決死貫徹している。

こうした人民軍の模範に従って社会の全構成員が党と領袖の思想と指導を貫徹するために一致決起しており、強盛国家建設のための闘争で高い精神力を発揮している。

不敗の人民軍を抜きにして有力な先軍政治を考えることはできない。

世界の人々は、朝鮮の不敗の力の源泉は、領袖、党、軍隊と人民の一心団結にあると言っている。

革命闘争では集まれば勝利し、散らばれば負ける。こういうところから団結は革命の生命であり、革命勝利の確固たる裏づけであるというのである。一心団結は革命隊伍が領袖を唯一中心として、思想的・意志的に、道徳信義的に固く団結した統一団結を言う。言い換えれば、革命の主力部隊である人民軍を中核、モデルとし、広範な大衆が党と領袖の回りに一つの思想・意志で固く結束された思想的純潔体、革命的同志愛と信義に基づいて結束された道徳信義的結合体なの

である。

こうした一心団結は、先軍政治のしっかりした政治的基盤であり、強力な推進力となる。

政治的基盤は一定の政治方式が根をおく本であり、その強固さを裏付ける源である。千万の軍民が党と領袖の周りに固く結束されたがゆえに、いかなる風波にも揺れない。

ある詩人夫婦が金正日総書記に送った手紙にはこういうくだりがある。

「信じて下さい！将軍様！

私たちは飢餓で死ぬことがあっても将軍様を抱いたこの心を売らず、寒くて凍死することがあっても将軍様の懐を離れて他人の家には一歩も入らず、監獄で殴られて死ぬことがあっても将軍様に対する歌を一瞬間も歌いやめないでしょう」

これは単に詩人夫婦の信念と意志だけでなく、千万の軍民みんなが体している信念であり意志である。

政治方式が現実的に実現されるためには、政治的力を持たなければならない。

いかに立派な政治的目的を打ち出したとしてもそれを現実に具現しうる能力に欠けているなら、そうした政治方式はいつになっても自分の姿を表すことができない。

一心団結は、人々の単なる機械的結合や算数的な合計ではない。

社会の全構成員が領袖の思想と意図、党の路線と方針

を死活の要求として受け止め、その実現のための闘争で心も、志向も、運命も未来も一つにしたのがほかならぬ一心団結なのである。

一心団結は、共同の政治的目的と理想を実現するための闘争へと広範な大衆を一様に奮起させ、彼らの革命的熱意と創造的積極性を高く発揮させて先軍政治を力強く推進していく。

今日朝鮮は、敬愛する金正恩同志を首班とする朝鮮労働党の指導の下、一心団結、渾然一体の威力で帝国主義者の策動を打ち破りながら、革命と建設を力強く前進させている。

それゆえ世界は朝鮮の不敗の威力の源が、領袖、党、軍隊と人民の一心団結にあるといっている。

在米同胞のインターネット「民族通信」のある論説委員は、こう書いている。

「ユダヤ人はある国の経済力が強いとか、国民が裕福に暮らしているとかといってその国を優れているとは見ない。…彼らは北朝鮮をなぜ強い国家だと認識しているのか。…

北朝鮮が核兵器とミサイルを保有しているからであろうか、そうではない。領土が広く、人口が多いからであろうか、そうでもない。

…北朝鮮のように自主性が強く、度胸があり、一心団結した力を持っている国家は世界のどこにもないと彼らは言っている。彼らは北朝鮮には偉大な指導者がおり、チュチェ哲学

があり、指導者と人民が一心団結した力、核より恐ろしい力があるということをよく知っている」

人々は普段、この世でもっとも有力な兵器といえば核兵器を念頭に置く。

指導者を中心にして思想的・意志的に、道徳信義的に結束した朝鮮人民の一心団結は、核兵器よりもっと有力である。

先軍政治の存立と発展の強固な基盤、強力な推進力となる一心団結、それは何ものにも喩えられない最上最大の武器である。一心団結は、朝鮮だけが持っている特許武器である。このような特許武器によって裏付けられている先軍政治は必勝不敗なのである。

5）新しい先軍指導体系

一般的に政治を実現するには、それを実行する機構と体系の樹立が必須的である。言い換えれば政治という内容物を入れうる、似合いの入れ物がなければならないということである。

今日朝鮮の先軍政治は、先軍指導体系によって立派に実施されている。

先軍指導体系は最高司令官を指導の中心とする体系である。

先軍政治では、他の国の政治体制で見られる一般的類型の政治指導者ではなく、ほかならぬ最高司令官が指導の中

心となっており、その唯一的指導体系を確立している。

それは軍事を重視する先軍政治そのものの要求である。

軍事を第一の国事として、軍事重視の政治を実施するためには、何よりも革命軍隊を柱として、主力部隊として育成しなければならない。

社会で人民軍の優先的な地位と役割を確固と保障し、彼らを先軍政治の柱として準備させることは、全軍を統率する最高の地位にいる軍指導者、最高司令官の指導体系の確立を離れて考えられない。

革命軍隊の最高司令官は、ぬきんでた軍事的英知で全軍の意思と要求を集成して軍建設と軍事活動の総体的方向を提示し、変化する軍事政治情勢を見抜いて科学的な戦法と戦術を打ち出す。

そしてすべての兵士たちを政治的・思想的に、軍事技術的に準備された有能な指揮官、兵士として育て上げる。

もちろん軍隊では分隊から小隊、中隊、大隊、連隊ひいては師団、軍団にいたるまで、上級の意図と命令を実行する整然とした軍事命令指揮体系が立っているのが通例である。だからといって最高司令官がいれば、その指導体系が当然確立されるといって、この活動に無関心であってはならない。

ある個別的指揮官の恣意的命令が許容されれば、命令に服従しない無秩序が助長される。ひいては最高司令官の命令とは異なる歪曲された命令が下され、すでに樹立された

指揮体系も有名無実になりかねない。それゆえ、最高司令官の命令指揮体系、指導体系を打ち立てる問題を優先的に解決していかなければならない。

最高司令官の指導体系は全般的革命武力が、最高司令官の命令、指示に絶対的に服従する規律と秩序であり、最高司令官の命令、指示によって一様に動く規律と秩序である。

最高司令官の先軍革命指導を先頭で奉じ、軍建設と活動で提起されるすべての問題を最高司令官の唯一的結論によって処理する、鋼鉄のような革命的軍指揮系統の確立、これが今日、朝鮮に樹立された先軍指導体系の真面貌である。

先軍指導体系はまた、国防重視の国家管理システムである。国防重視の国家管理システムであるという時、それは一言で言って、軍事重視の原則で国家機関を組織し、国家社会生活全般を指揮し、管理する政治システムである。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれは帝国主義者の横暴な策動に主動的に対応するために先軍政治方式を選択し、国家機構体系における国防委員会の地位を高め、国家・社会生活のすべての分野で軍隊が重要な役割を果たすようにしました」

先軍政治を実現するためには、社会体制全般とそのすべての機能が国防を重視する方向で動くようにし、社会の全構成員が軍事を第一の国事として重視する気風を確立していかなければならない。

国防重視の国家管理システムは、国防委員会を中枢としている。

一般的に社会主義国家の国防活動は、帝国主義の侵略から国と人民、社会主義制度を守る重大な活動である。それゆえこの活動を成功裏に遂行するためには必ず、国の軍事活動、国防活動を全的に受け持つ国家機構が必要となる。

かつて社会主義を建設していた諸国の国家機構システムを見れば、もちろん国防活動を受け持つ国家機構はあった。しかし国家機構システムにおいて中枢の位置にいたのではなく、ほかの機構と同等な位置にいたり、ある場合には従属的な位置にいたりした。

先軍指導体系では、国防委員会が国家主権の最高国防指導機関として他の国家機構と同等な地位、従属的な地位にいるのではなく、その中枢として指導的地位を占めている。

国防委員会を中枢として社会のすべての国家機関が構成されていることからして、名実ともに先軍政治を実質的に保障する機構としての使命を果たしているのである。

国防重視の国家管理システムは、国防委員会の統一的指導の下に、軍事優先の原則で国家社会生活の全般を組織、指揮している。帝国主義侵略勢力と対抗して祖国を防衛し、民族の自主権を守る活動は、一人や二人の力や特定の社会的集団の力、制限された部門の機能と役割だけではスムーズに行うことができない。この活動は包括的な政治組織、

国家機構の統一的指導を要する。

偉大な金正日総書記の指導の下に朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 10 期第1回会議では、国防委員会を国家主権の最高国防指導機関、全般的国防管理機関として規定する「金日成憲法」が採択された。こうして、先軍政治が制度的に、全社会的規模で強固に裏付けられる、新しい体系が確立するようになった。

「金日成憲法」の採択は、世界の耳目を引いた。

当時朝鮮を訪問していた旧ソ連国家保安委員長であったクルチュコフは、最高人民会議第10期第1回会議で修正補充した社会主義憲法について、「金日成憲法」は20世紀の創造物の一つである、憲法に軍事問題を明白にしたのがよい、政治はすなわち力であるがゆえに、政治のベールをはがせば軍事であるが、その本質を憲法に正しく反映させたと言った。

彼の言葉には帝国主義者と反動層の強権と専横が跋扈する現代国際社会で、それぞれ国家の政治は本質上、軍事力を第一位におき、それを打ち固める活動を通じてのみ正しく実現され、その要求を朝鮮で立派に解決したという賛辞がこめられている。

朝鮮に確立された国防重視の国家管理システムは、国防委員会を中枢とする世界に類例のない国家機構システムである。

「金日成憲法」の採択により、軍事重視の国家管理システムを確立した朝鮮の社会主義は強固であり、その威力は先軍によって今後より高く誇示されるであろう。

「わが党が銃剣を重視し、先軍政治を敷いている限り、わが国は微動だにしません」

金 正 日

4. 先軍政治と今日の現実

偉大な思想は偉大な政治を敷き、偉大な政治は偉大な現実を生む。

現実は該当の思想と政治が正しいのか、正しければそれが国を発展させ、民族の繁栄を遂げる上でどの程度の生活力を発揮したかをみせる尺度である。

先軍政治は社会主義の守護と強盛国家の建設、祖国統一のための朝鮮人民の闘争で大きな転換をもたらした。朝鮮は、先軍の力、正義の銃剣で自らの自主権と尊厳を守り、社会主義強盛国家建設を進める驚異的な現実を開いた。アメリカ帝国主義と反統一勢力の分裂主義的策動が破綻され、祖国統一の明るい展望が開かれるようになったのも、先軍政治を離れて考えられない。

朝鮮が軍事力が強ければ小さな国も大国の地位に達することができるという真理を悟らせながら世界を自主化の道へと導くうえで先導的役割を果たしているのも先軍政治がもたらした結果である。

人類の政治史は、一つの政治方式があれほど短い歴史的期間に世界の人々を驚かせる奇跡を生み、壮大な創造と変革をもたらした事実を知らずにいた。

それゆえ現代は先軍政治が全面的に実現される偉大な先軍時代であるといえる。

それでは先軍政治によって朝鮮にもたらされた勝利について、世界に及ぼす先軍政治の影響力についてみることにしよう。

1） 朝米核対決

世界で始めて核兵器を開発したアメリカ帝国主義は、1945 年 8 月 6 日と 9 日、日本の広島と長崎に原子爆弾を投下して莫大な被害を与えた。

キノコの雲がもたらした被害により、広島で破壊、損失された面積が 13 ㎢、被害家屋が約7万戸、死亡者が約26万名に達したという事実は、核兵器が人類にどれほど恐ろしい惨禍をもたらしたかを見せている。

朝鮮のように長い期間、アメリカの核恐喝を受けてきた国と民族はない。

アメリカの核恐喝は、朝鮮戦争の時期から露骨になった。

1950 年 11 月、アメリカ大統領であったトルーマンは、朝鮮戦争での原子爆弾の使用について公言し、米極東軍司令官であったマッカーサーは、朝中国境地域に原子爆弾 30～50 個を投下する計画であると露骨に言いぬかした。1951 年の 9 月と 10 月にはアメリカ空軍の「B－29」爆撃機が平壌の上

空に原子爆弾を投下する演習まで行ったほどである。

アメリカの核脅威は戦後にもっと加増された。1957 年南朝鮮に初の戦術核兵器を搬入、配備したアメリカ帝国主義は、1968 年 1 月 23 日、武装情報収集艦 「プエブロ」号が、人民軍に拿捕されるや、核兵器を使用すると脅かした。1975 年当時アメリカ国防長官は、朝鮮で戦争が起これぱアメリカは核兵器を使用する、と暴言を言った。

冷戦時代にアメリカは 1 万 3 千の核兵器を海外に配備したが、そのうち 6 千個以上が朝鮮半島周辺とアジアに配備された。南朝鮮は極東最大の核火薬庫、核前哨基地と化した。

アメリカ帝国主義は 1990 年代の初めに「核兵器開発疑惑」と核査察問題を持って、朝鮮を国際的に孤立させ、朝鮮式社会主義制度を崩壊させるための強硬圧殺策動に狂奔した。

1968 年 7 月 1 日に調印された核拡散防止条約には核兵器を持っている国が、持っていない国に核脅威をしないという内容がある。これを重視し、南朝鮮でのアメリカの核兵器を撤収させ、朝鮮にたいするアメリカの核脅威をなくして朝鮮半島を非核地帯に作る目的の下に朝鮮は1985年12月に核拡散防止条約に加入した。

しかしアメリカは核兵器保有国が非核国家を核兵器で威嚇しないようになっている条約上の義務を履行する代わり、朝鮮にたいする核脅威をさらに強化した。

アメリカは国際原子力機構に圧力を加えて、核活動とまっ

たく関連のない2個の軍事対象に対する特別査察を強要した。アメリカに追従した国際原子力機構は、1993 年2月、朝鮮の軍事対象に対する特別査察を強要する決議を採択した。

ペルシャ湾戦争以降、軍事力万能の力の論理にもっと気が狂ったアメリカ帝国主義は、1993 年 1 月 26 日には既に中止していた「チーム・スピリット」合同軍事演習を再開すると公布して史上最大規模の「チーム・スピリット 93」合同軍事演習を行った。アメリカ帝国主義はこの演習にアメリカ本土とハワイ、グァム島、日本の米軍基地で迅速反応展開武力をはじめ20 余万の侵略武力を動員した。そしてトマホーク巡航ミサイル、「F—117」ステルス爆撃機、核爆弾の投下を専門とする「B—1B」戦略爆撃機を出動させ、その上に核兵器使用時の指揮通信システムまで発動させた。

こうして朝鮮半島の核危機が極限に至り、朝鮮にはいつ戦争が起こるかわからない一触即発の超緊張状態が醸成された。

アメリカ帝国主義が核兵器を振りかざし、朝鮮を崩そうと躍起になっている状況の下で、アメリカ帝国主義との軍事的対決にどう対抗するかは、国と民族、社会主義の運命と関連する死活の問題として提起された。

この厳しい時期に偉大な金正日総書記は 1993 年 3 月 8 日、朝鮮人民軍最高司令官の命令第 0034 号「全国、全民、全軍に準戦時状態を宣することについて」を下達した。

全国が準戦時状態へと移り、朝鮮人民軍の陸海空軍部隊と朝鮮人民警備隊、労農赤衛隊、赤の青年近衛隊の全隊員は、敵撃滅の気概も高く万端の戦闘動員態勢を取り、祖国の領土、領海、領空を固く守った。続けて、1993年3月12日、核拡散防止条約から脱退するとの共和国政府の声明が発表された。

これは朝鮮にたいするアメリカの核恐喝策動と国際原子力機構の不当な特別査察強要に対処して民族の自主権と国の最高利益を守護するための当然の措置であった。

軍事的圧力と核圧力騒動で朝鮮を屈服させようと狂奔していたアメリカ帝国主義は、痛烈な打撃を受け、期限前に「チーム・スピリット」合同軍事演習を中止すると公布し、国際原子力機構は特別査察騒動を放棄せざるを得なかった。

厳しかった朝米間の核対決は、アメリカが朝鮮との政府級会談に応じることにより、それ以降、3 段階にわたる朝米会談の形態で続けられた。

朝米会談は、外交分野での朝鮮とアメリカとの銃声・砲声のない戦争であると言えるほど熾烈に行われた。

帝国主義との政治的・外交的対決で革命の根本的利益を固守するためには、いささかの譲歩も知らない強硬な姿勢で自主的な外交戦を行わなければならない。しかし、強力な自主外交は願うからといって実現されるのではない。

帝国主義との熾烈な外交戦で勝利を収める基本保証は、

常にしっかりとした自国の軍事的威力にあった。先軍政治によってもたらされた不敗の軍事力があったがゆえに、朝鮮は圧力と恐喝を基本手法とする帝国主義者との外交戦、朝米会談で自主的支柱を立て、引き続き強硬に突き詰めながら自分の要求を全面的に貫徹していった。こうして 1994 年 10 月 21 日には朝鮮半島の核問題を解決するための朝鮮の正当な立場と主張が反映された朝米基本合意文が採択発表されるようになった。

朝米基本合意文で朝鮮は、黒鉛減速炉とその連関施設の凍結と解体、非核化意志の表明、核拡散防止条約の復活を保証した。

その見返りにアメリカは、2003 年まで総じて 200 万 KW 発電能力の軽水炉発電所(約 40 億ドル)の提供とその前に毎年 50 万トンの重油納入、貿易及び投資障壁の緩和と連絡事務所の設置、国家関係樹立、核兵器の不使用と核兵器で朝鮮を威嚇しないことなどを約束した。

この前日である 10 月 20 日、当時のアメリカ大統領クリントンは偉大な金正日総書記を朝鮮民主主義人民共和国の最高指導者と呼称しながら、大統領のすべての権限を行使して朝米基本合意文を責任的に履行すると確約する担保書簡を送ってきた。

朝米基本合意文が採択されたことにより、核問題をかけて朝鮮を圧殺しようとしていたアメリカの政策は水の泡となり、

世界の唯一超大国、核大国だと自認していたアメリカは、朝鮮との核対決で膝を突いてしまった。

しかし、アメリカは軽水炉の提供でも自分の義務を履行しなかった。朝米基本合意文には、合意文に署名された日から6 ヶ月以内に軽水炉の提供契約を結ぶことになっていた。しかしアメリカは 14 ヶ月間が経ってからやっと契約を締結し、不当な口実をつけながら軽水炉の建設を遅延させてきた。

アメリカの誤った行動により、2003 年まで提供することになっていた軽水炉の建設は、基礎工事のための穴を掘っておいただけであった。

アメリカは朝米基本合意文第 3 条に従って核兵器を使用せず、核兵器で威嚇もしないと公式の担保を提供することになっていた。

2002 年の初期、当時アメリカ大統領であったブッシュは、一般教書で、北朝鮮は「悪の枢軸」をなす国だの、大量殺戮兵器を開発している国だのといって名指しで攻撃してきた。

2002 年 10 月のはじめ、アメリカ大統領の特使であるアメリカ国務省の次官補ケリーの平壌訪問以降、アメリカは朝鮮が濃縮ウラニウム計画を推進している、それを中止しないと朝米関係はもちろん、北南関係も、朝日関係も破局的状態に入るであろうと威嚇した。アメリカは 11 月 14 日、朝米基本合意文にしたがって行っていた重油の提供を中断するとの決定を発表し、12 月から実際にそれを中断した。

こうして事実上朝米基本合意文は完全な破棄状態に入り、敵の策動は極度に達した。

アメリカの加増する核戦争威嚇と制裁圧力策動に対処して、朝鮮は国の自主権と人民の生命財産を守るための実際的対応措置の一環として、戦争抑止力を強化する道へと進まざるを得なくなった。

アメリカとの全面的対決戦を行っている朝鮮が自らの戦争抑止力を強化することは、至極正当である。

以前アメリカ帝国主義は朝鮮に反対して核戦争を開始しようと何回も試みていた。もし朝鮮の力が弱かったならばすでに戦争が起こって久しかったであろう。すると朝鮮人民の運命はどうなり、朝鮮半島の情勢はどうなっただろうか。

さぞかしイラクやリビアのようになり、朝鮮半島は去る世紀末のバルカン半島や新世紀初期のアフガニスタンのようになったであろう。それも人類がいまだ体験したことのない最も破局的な核戦争として歴史に記録されたであろう。

先軍で力を培ったため、アメリカはあえて戦争の引き金を引っ張ることができずにおり、したがって朝鮮半島と東北アジアの平和が今まで維持されているのである。

国際社会が朝鮮の戦争抑止力を指して朝鮮半島と東北アジアの平和の頼もしい担保であるというのは決して偶然ではない。朝鮮の戦争抑止力は地球上のどこにいようが、侵略の本拠地を精密打撃して消滅しうる信頼度の高いものである。

われわれの惑星に核の惨禍をもたらした唯一の核の戦犯者、核兵器を最初に作り、最も多く持っている悪の帝国、それでいて非核化と核拡散防止を一番騒がしく云々する破廉恥極まりのない国がまさにアメリカである。しかし核兵器は決してアメリカだけの独占物ではない。アメリカが朝鮮に対して核威嚇をしていた時代は永遠に終わった。

朝鮮も自らの戦争抑止力に依拠して侵略と戦争の元凶であるアメリカにせん滅的打撃を与えるように準備されている。帝国主義者の侵略的野望は絶対に変わらず、国と民族の自主権は、言葉や請願ではなくひとえに自らの強力な力に依拠して守らなければならない。朝米核対決はこれを実証した。

2）先軍8景

朝鮮は昔から山が美しく、水が清らかで三千里錦の山河と呼ばわれ、朝鮮民族は、その有名な景色と美しい世態を 8 景に選んで誇る風習をもっていた。すでに世界にも広く知られている関西 8 景、関東 8 景を初めとして、朝鮮には歴史とともに今日まで伝えられている 8 景がたくさんある。これには自分の故郷と祖国を愛する朝鮮民族の気持ちが反映されている。

先軍8景は先軍の旗の下に力強く前進する時代の息吹を反映したチュチェ朝鮮のシンボルである。

先軍 8 景には、白頭山の日の出、小松林陣地の雪景色、

鉄嶺のクロフネツツジ、将子江の夜景、ウルリム滝のこだま、ハンドゥレ原の地平線、大紅丹のジャガイモの花盛り、泛雁里の理想郷などが属する。

先軍8景は、時代の新しい自然の景色を代表するだけに、自然美そのものからしても珍しい絶景をなしている。将軍峰を主とする白頭連峰の奇岩絶壁と千里樹海を染めかけてから一瞬に周辺を赤紅の焼けで覆ってしまう白頭山の壮大な日の出を初め、一つ一つの風景がみな珍しい自然風致の絶頂である。

先軍 8 景は、先軍時代が産んだ新しい仙境である。景色には当代の時代相が反映される。

先軍時代は、帝国主義との対決で民族の運命と社会主義を守護するための決死抗戦の時代であると同時に、社会主義強盛国家建設のための闘争が新しい段階で行われる偉大な時代である。英雄的闘争と壮大な変革で社会主義強盛国家建設が力強く進められている躍進する時代に先軍朝鮮の必勝不敗の威力と気概、鉄の信念と意志を反映して生まれたのがこの先軍8景なのである。

先軍8景のうち、いくつだけを紹介しよう。

朝鮮の北部地帯に四季にわたって白雪を頭に載せ、厳かにそびえている白頭山は、5 千年の悠久な民族史とともに朝鮮人民の心に民族の気概と祖国愛のシンボルとして抱かれてきた。チュチェ思想の輝かしい光で朝鮮民族の自主権を

守ってきた白頭山は、今日、先軍革命の勝利を知らせる聖山として毅然とそびえている。先軍８景の第１にあげられる白頭山の日の出は、希世の偉人であり、先軍革命の統帥である金正日総書記の偉人像を表す先軍時代の絶景である。これには偉大な金日成主席が切り開いたチュチェ革命偉業を最後まで完成して、朝鮮人民を世界で最も自主的で幸せな人民にならせようとする総書記の雄志がそのまま反映されている。

先軍8景には、いかなる難関や試練をも乗り越えて、隆盛・繁栄する社会主義強盛国家を建設していく朝鮮人民の剛直な意志と大死一番の闘争精神、この過程で創造された誇らしい創造物が反映されている。

先軍8景の一つである将子江の夜景は、朝鮮労働党の先軍指導を奉じて社会主義を守り抜くために死を覚悟した大胆な攻撃戦を行い、苦難の行軍、強行軍を楽園への行軍に転換させた江界精神の生活力がそのまま反映されている。

1990 年代の苦難の行軍、強行軍の時期、自分の指導者を絶対的に奉じてきた慈江道の人民は座って泣き言を言ったのではなく、指導者の構想と意図を実現するための闘争に一様に奮い立った。すべてが不足していたその厳しい時期に食料ではなく、仕事をもっと任せてくれといったのが慈江道の労働者階級であった。死ぬことがあっても機械設備だけは保持しなければならないという覚悟を持って工場を運営し、金正日総書記が与えた課題を決死貫徹したのであった。

慈江道の労働者階級と人民は、革命的軍人精神を立派に具現して6カ月あまりの期間に29の各種の中小発電所を新たに建設し、整備補強して、多くの発電能力を造成した。自力で生産した電気で170の地元産業工場を回し、2万1300あまりの世帯に電気暖房を保障するなど、新しい模範を創造した。

慈江道で創造された新しい模範は、全般的社会主義建設において革新をもたらした。

金正日総書記は、慈江道は苦難の行軍の時期、私にとってなじんだ土地であるといいながら慈江道の労働者階級をはじめとする勤労者たちの闘争精神を江界精神と命名した。

苦難の行軍、強行軍の忘れない日々を追憶しながら、夜空の星が降りたような江界市の明るい光が将子江に映され、神秘な夜景を開いている。

「道は険しくとも笑顔で行こう！」というスローガンの下に度重なる苦難と試練を乗り越えてより明るい明日のためにもっとたくさん働き、もっとたくさん創造した朝鮮人民の気概を集中的に見せている。

ハンドゥレ原の地平線についてみよう。

ハンドゥレ原の地平線は、耕地整理ですべての野原を総合的機械化を実現しうる先軍時代の社会主義の土地、主要穀物産地に転換させようという朝鮮労働党の大自然改造の構想とその実現をめざす闘争過程が反映された景色である。

耕地整理をして田畑をみな規格化してこそ各種の農作業

を機械化して農民の骨の折れる労働を軽減させ、新しい土地を得ることができる。耕地面積が制限されている朝鮮の場合、穀物増産の大きな予備は耕地整理にある。

朝鮮では耕地整理が一番立ち遅れており、作業条件が不利である江原道から先に行い、その経験を一般化して全国の土地をみな整理するようにした。

耕地整理に動員された人民軍軍人と人民は、沼地が現れればブルドーザーを滑り台の上に載せてやり、凍った土地が現れればそれを削る機械を創案導入するなど、瞬間も止めることなく連続的に行って、段階別の目標を成功裏に遂行していった。

江原道についで平安北道、黄海南道、平安南道、平壌市で耕地整理が活発に行われ、耕地整理では新しい転換の歴史がもたらされるようになった。

10 年、50 年を見通して大胆でスケールが大きく計画を立て、すべての田畑を大規模の規格田圃に変え、水溜りも埋め、水路と道路も整理して新しい土地をよりたくさん得るようになった。ハンドゥレ(ひとつるべ)ずつ汲んで営農をしたという、ごたごたしたちっぽけな田畑が大規模の田圃に整理されたハンドゥレ原の地平線の景観は、実に胸をすっきりとさせる。

大紅丹のジャガイモの花盛りには、朝鮮をジャガイモの名産地に作って人民の食生活をより豊かにさせようという朝鮮労働党の構想が反映されている。

6月の末から咲き始めるジャガイモの花は7月の中旬と末ごろには、一望果てしない大紅丹が原を真っ白に覆ってしまう。白波打つジャガイモの花盛りの恍惚さは、人々に明日にたいする希望と楽観を胸いっぱい感じさせる。

大紅丹のジャガイモの花盛りの景色は、北の地方に開かれた社会主義強盛国家建設の今ひとつの風景であるといえる。

先軍8景は、先軍政治の貴い所産、先軍時代の貴重な創造物である。

先軍8景は、金正日総書記の祖国と人民にたいする熱い愛情と献身的な奉仕精神、そして朝鮮人民の熱烈な祖国愛を反映している。

これとともに党の遠大な構想を体し、自分の祖国を一日も早く富強な社会主義強盛国家に建設しようという、朝鮮人民の強烈な志向と熱烈な社会主義的愛国主義精神を反映している。

先軍8景は、朝鮮民族の誇らしい財貨である。それは先軍時代に生き、活動する朝鮮人民に大きな民族的誇りと自負を抱かせ、同時により輝かしい強盛国家を建設しようとする彼らの闘争を力強く励ましている。

先軍8景に次いで、朝鮮人民が社会主義強盛国家建設で遂げている大きな成果を反映した先軍9景、先軍10景、先軍11景、先軍12景、先軍13景など新しい仙境が次々と生

まれている。

2012年12月12日、9時49分46秒、人工地球衛星「光明星-3」号2号機が宇宙へと飛び上がった。打ち上げて9分27秒の後、運搬ロケット「銀河－3」から脱して自分の軌道に正確に進入した「光明星－3」号 2 号機から流れる不滅の革命頌歌「金日成将軍の歌」と「金正日将軍の歌」が宇宙に響いた。

金正恩同志は次のように述べている。

「100％われわれの力と技術、知恵によって科学技術衛星の製作と打ち上げに成功したのは、太陽民族の尊厳と栄誉を最高の境地に至らしめた大慶事であり、千万軍民に必勝の信念と勇気を与え、朝鮮は決心すれば必ず実行するということをはっきりと示した特筆大書すべき出来事でした」

人工地球衛星は当該諸国の経済と科学技術の粋であると言える。それは人工地球衛星の製作と打ち上げの全過程が電子工学、機械工学、サイバネティックス、宇宙工学、電子要素工学、システム工学など、現代応用科学技術の総合体であるからである。

衛星を打ち上げるには金属工業が必要であり、 また、各種の部品を作る機械を製作する機械工業もまた必要である。

衛星はオート・コントロールシステムであるため、コンピュータ産業とソフト産業が発展しなければならず、衛星との連携を保障しうる通信技術もまた必要である。

言い換えれば、国の経済と科学技術の発展なしには、その製作と打ち上げが不可能だということである。

「光明星—3」号 2 号機は地球観測衛星である。その近地点高度は 499.7 ㎞であり、遠地点高度 584.18 ㎞、周期は 95 分 29 秒、軌道の傾斜角は 97.4°である極軌道衛星である。

今、人工地球衛星「光明星—3」号 2 号機は太陽同期極軌道に沿って飛行している。

太陽同期極軌道は、人工地球衛星の飛行軌道のうち、最も特異な軌道の一つである。この軌道は広く利用されながらも技術的に達成しがたい軌道として、当該国の宇宙技術発展程度を見せる尺度の一つとなっている。

「光明星—3」号 2 号機の打ち上げの成功は、チュチェ工業の威力と国の科学技術的潜在力を遺憾なく誇示し、世界に向かって堂々と前進する朝鮮の意志を見せた歴史的壮挙であった。

人工地球衛星の打ち上げにより、「光明星」という言葉は世界にもっと知られるようになった。

「光明星—3」号 2 号機の飛んでいる青い空、宇宙を征服していく朝鮮のこの現実こそ、先軍時代のいま一つの新しい仙境であると当然言えるであろう。

空には衛星を、地上には桃源郷を！

今この時刻も自分の軌道に沿って回っている衛星とともに、日一日と自分の面貌を変えている誇らしい現実とともに

朝鮮の未来はもっと明るくなるであろう。

先軍時代を代表する新しい景色、仙境はこれからも次々とたくさん生まれるであろう。

国力が強く、すべてが興隆し、人民が何羨むことなく幸せに暮らす国、強盛国家の未来は、先軍時代の新しい景色、仙境とともにもっと早められるであろう。

3） 6.15 統一時代

朝鮮民族は、5 千年の悠久な歳月、一つの領土で単一民族の血筋を繋ぎながら輝かしい文化を創造してきた。

こうした朝鮮民族が外部勢力によりさる世紀の 40 年代から国が北と南に分かれ、民族史上最も大きな不幸をなめている。

軍事境界線により一つの民族が二分されて、血肉の生死いかんも知らずに苦痛をなめている。領土だけでなく、社会制度もまったく異なる二つが存在し、民族内部の莫大な人的および物的財貨が政治的・軍事的対決に費やされている。分裂の現実が代をついで半世紀以上も持続することにより、民族の統一的発展と繁栄には大きな障害がもたらされている。

祖国統一は、朝鮮民族の最大の宿願、史上の課題である。それゆえ、朝鮮民族は外部勢力によって国土が分断されたその日から、祖国統一のための闘争を激しく展開してきた。

しかし、アメリカ帝国主義をはじめとする反統一勢力の悪

辣な策動により、祖国統一をめざす朝鮮民族の闘争では決定的転換をもたらすことができなかった。

アメリカと南朝鮮の当局者は、朝鮮が苦難の行軍を行うともうすぐ崩壊すると騒いだ。はなはだしくは朝鮮が 3 日、3 カ月、3 年間で崩壊するとまで言いふらした。

その後朝鮮が苦難を乗り越えて軍事力に基づく国力をとどろかせ始めると崩壊説を修正して、「ソフト・ランディング」論を唱えはじめた。「ソフト・ランディング」論は、朝鮮と適当な関係を維持しながら、徐々に崩そうという狡猾な計画であった。

朝鮮が先軍の銃剣を高く掲げて進むと、アメリカ帝国主義とその連合勢力は朝鮮に対する崩壊戦略の敗北を認め、朝鮮と関係を結ぶ方向に移った。

こうした情勢の流れからして南朝鮮の保守的な政治家と執権上層は北南関係改善と国の統一問題を執権維持の名分とするようになり、結局、南朝鮮の執権者が平壌を訪れるようになったのである。

そうする過程で 2000 年 6 月 13 日から 15 日の間に、平壌で分断史上55年ぶりに初めて北南首脳の歴史的な対面と北南最高位級会談が催されるようになった。

世界各国の新聞、放送、通信は、金正日総書記が空港にて金大中「大統領」を出迎え、朝鮮人民軍陸海空軍名誉衛兵隊を査閲する場面を放映し、特筆すべき出来事、20世紀の奇跡と報道した。アメリカの CNN 放送と日本の NHK 放送

など多くの放送が定期放送まで中断しながらこの知らせを先をそろって報道した。

歴史的な平壌対面を取材するためにソウルのある記者センターには、朝早くから289(そのうち外信173)の言論機関で1 275名(外信503名)の取材陣が押し寄せ、込んでいたという。

この日、金正日総書記は世界的な関心の中で平壌市60万群衆の熱烈な歓迎を受けながら金大中「大統領」とともに宿所まで同行し、宿所で談話を交わして記念写真を撮った。

総書記は金大中「大統領」との単独会談で7千万の同胞に祖国統一に対する希望と未来への楽観を持たせる宣言文を作り出すことを提案した。続けて総書記は民族の力を合わせて自主的に統一する問題とその方途、非転向長期囚の送還、離散家族・親戚の訪問団交換、北南対話など、祖国統一の実現に向けた原則的かつ重要な問題を主導的に提起し、その解決へと会談を導いた。こうして「わが民族同士」を中核とする五つの項目からなる北南共同宣言が生まれるようになった。

金正日総書記は次のように述べている。

「歴史的な平壌(ピョンヤン)会談と六・一五北南共同宣言は、民族の大団結と自主統一の新しい時代を開きました」

北南共同宣言は国の統一問題をその主人である朝鮮民族同士がお互いに力をあわせて自主的に解決していくことを

厳に宣した、自主統一宣言である。また北と南間の対決と戦争脅威を終わらせ、同族間の信頼をはかり、和合を遂げるための統一志向の宣言である。

6.15 北南共同宣言には、ひとえに自主のみが民族の生命であり生きる道であるという真理が込められており、いかなる物理的障壁も、歳月の流れも決して分けることのできない一つの民族、ひとつの血筋で結ばれた同胞に対する愛情が込められている。これとともに民族分断の恥ずかしい歴史を終えて、全同胞が結束しようという切実な念願も込められている。

6.15 北南共同宣言が採択されたのは全的に金正日総書記の先軍政治がもたらした民族史的出来事であった。

これについてアメリカ・ハワイ東方・西方研究センターの首席研究員も論文で「6.15 北南共同宣言は、ほかならぬ先軍政治の産物である。北の先軍銃剣の威勢により平壌会談がもたらされた。軍力により裏打ちされた北の自主統一路線があったがゆえに朝鮮民族同士が手を取って統一することを確約する、歴史的な自主統一宣言が出るようになった」と書いている。

平壌対面と北南共同宣言発表があった後、南朝鮮では金正日総書記をたたえ、信頼し従うのが主流を成すようになった。

金正日総書記の意志と決断力によってわずか丸 3 日もならない間に統一の里程標が作られ、これを契機にして総書

記の偉人としての品格に接するようになった南朝鮮の人民と海外同胞たちは、一様に総書記を「将軍中の将軍」、「海のように開かれた性格を所有した方」、「判断力が優れている方」とたたえ敬慕した。

南朝鮮の「第1ラジオ」放送は「北と南は全世界が注目する中で共同宣言を採択することにより自主の第一段階を立派に飾った。誰も予想していなかった歴史的な合意があれほど早くなされたことは、金正日国防委員長の底力を誇示するに十分である」と報じたという。

ソウルのある大学の研究センターが995名の学生を相手に世論調査を行った結果、学生の90%以上である900余名が「祖国統一を成す待望の指導者は金正日将軍様」と答えたという。

かつて南朝鮮の人民は崇米思想に染まっていた。しかし今彼らは、アメリカ帝国主義が決して解放者、援助者ではなく、侵略者、略奪者であり、民族にあらゆる苦痛と植民地奴隷のくびきをかけようとする禍根であるという認識が確固と支配するようになった。アメリカが同盟者、友邦でなく、朝鮮の統一を妨害している主な障害物であることを認識した南朝鮮の人民は、「親米で滅びた国を反米で取り戻そう！」というスローガンの下に反米自主化闘争を激しく行っている。

6.15 北南共同宣言が効力を発生して、北南関係では民族分裂史上かつてなかった出来事が相次いで起こり、和解と

協力関係が各分野で深化、発展した。

2000年7月29日から2003年4月までの間に、アメリカと反動保守勢力の妨害策動の中でも10回あまりの北南相級会談と3回の特使訪問と会談が行われ、4回の北南経済協力推進委員会と19回の実務接触と分科会議が開かれた。

北南関係で多くの変化が起こる中、民間級接触と往来が活性化された。

2002年の秋、釜山で行われた第14回アジア競技大会と2003年の夏、大邱で行われた第22回世界大学生スポーツ競技大会に、共和国の選手団と応援団が参加して統一の雰囲気を高揚させた。

2006年12月カタールのドーハで行われた第15回アジア競技大会の開幕式場に、北と南の選手たちが統一旗を掲げてともに入場して、民族の和合と統一の熱風を巻き起こした。

2003年6月14日には、6.15北南共同宣言発表3周年を迎えながら、北南間の東海、西海鉄道連結行事が行われて世界の注目を引いた。

平壌では2007年10月、再び北南首脳の対面が行われた。

6.15北南共同宣言が採択された後、それを履行するための闘争は内外の分裂主義勢力の悪辣な挑戦にぶつかるようになった。

アメリカのブッシュ政権は、好ましく発展していた北南関係を全面的に遮断させ、朝鮮を武力で転覆するための新し

い戦争策動に狂奔し、これに南朝鮮の極右翼勢力も積極的に追従した。

しかし先軍で打ち固められた強力な力があったがゆえに共和国は、アメリカ帝国主義と南朝鮮の極右翼勢力の反統一策動を打ち破り、統一のための激しい闘争を展開することができたのである。しっかりした軍事力に依拠した共和国の強硬な立場により、アメリカは仕方なく核威嚇をしないという、2005 年の 9.19 共同声明と 2007 年の 2.13 合意文に調印せざるを得なくなったのである。

こういう中で 10 月 4 日には「北南関係発展と平和繁栄のための宣言」も発表されるようになった。

10.4 宣言は「わが民族同士」の理念を朝鮮の統一を実現するための里程標と確認し、それを幅広く具現するための問題を明らかにした。

具体的に北南間の軍事的信頼の構築、平和保障体制の構築の実践的方案、民族共通の繁栄のための幅広い経済協力事業の活性化、「西海平和協力特別地帯」の設置、2008 年の北京オリンピック競技大会に北南応援団が西海線列車を利用して参加する問題、白頭山観光実施のような問題をはじめ、民族の和解と団結、統一を遂げるための方途が闡明されていた。10.4 宣言が採択されることにより、統一をめざす朝鮮人民の闘争はより力強く前進するようになった。

6.15 北南共同宣言とそれを具現するための実践綱領で

ある 10.4 宣言、これはほかならぬ先軍政治がもたらした結実である。

今日、北と南、海外のすべての朝鮮民族は先軍政治に対して大きな民族的矜持と自負を抱いている。

民族の尊厳は言葉だけでは守れず、同胞の自主的統一は請願で成されないというのが、朝鮮民族が骨身にしみて感じている貴い真理である。

南朝鮮の 21 世紀政治学研究フォーラムの教授であるジンチョルは、「全同胞は先軍の福を被っている」という題の文章で次のように述べている。

「以前には知らずに、報いなしに享受ばかりしていた先軍の福、十回、百回考えて見てもありがたく、千万金で払っても返すことのできない金正日総書記の恩恵は実に大きい。

世界で初めて銃剣を幸運の霊剣と変えた先軍の太陽金正日将軍、将軍をいただいているがゆえに全同胞が被る先軍の福は永遠の金正日福である。

命で守ればもっと強くなり、真心を尽くせば日一日と大きくなり、清らかな心で従えばより暖かくなる先軍福、ありがたい先軍福に衷情で報いよう！

民族の特典―先軍に同胞の生と未来がある。

恵まれた民族としての矜持と自負を抱き、金正日将軍の先軍政治を一心で奉じよう！」

朝鮮民族の統一運動史にかつてなかったこうした驚異的

な出来事は、決して歳月がもたらした偶然ではなく、先軍の威力によってもたらされた偉大な勝利であった。アメリカと南朝鮮の保守執権勢力の悪辣な策動により、北南関係はまたもや悪くなり始め、6.15 の理念を具現する上にも少なからぬ試練と難関に直面するようになった。しかし民族最大の宿願である祖国統一の歴史的偉業が達成される時まで 6.15 の理念と意志は決して変わらないであろう。

それは「わが民族同士」の理念が先軍の銃剣によって裏打ちされる全同胞の共通した志向であるからである。

国と民族の運命を守り祖国統一の前途を明らかにする先軍の旗じるしとそれによってもたらされた 6.15 の理念があるがゆえに、全朝鮮民族はアメリカと反統一保守一味の策動を打ち破って、必ず三千里の山河に統一の暁をもたらすであろう。

4）反帝自主の道へと進む世界

「帝国主義に反対し自主性を擁護することは、今日世界の進歩的人民の前に提起される共通の闘争課題です。進歩的諸国の人民は帝国主義者に息をする暇を与えずに、それに反対する闘争を引き続き強化し、最後の勝利を遂げるまでたたかわなければなりません」

これは 2005 年 9 月 30 日から 10 月 1 日まで、ベネズエラボリバル共和国の首都カラカスで行われた 21 世紀の反帝自

主偉業に関する世界大会でラテン・アメリカチュチェ思想研究所委員長ホセ・フランシスコ・アギルラル・ブルガレリが行った報告の一くだりである。

大会には、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ、ヨーロッパを始め、40 あまりの国と、2 個の国際機構から来た代表団と代表たち、ベネズエラの政府、政党の人士が参加した。

大会の参加者たちは、先軍の旗の下に社会主義の不敗のとりでとしてそびえ、世人の脚光を浴びているチュチェ朝鮮の威容は、すべての進歩的で反帝的な人民に大きな力となっていると言った。

彼らは先軍の道だけが、人民大衆の自主性を擁護し、国と民族の自主的発展と富強・繁栄を遂げるもっとも正しい道であると確認した。

金正日総書記は次のように述べている。

「われわれの先軍政治は、国際舞台で帝国主義侵略勢力に打撃を与え、反帝・自主勢力を励まし、世界の自主化偉業を力強く促しています」

大会では独創的な先軍政治で社会主義偉業、反帝自主偉業を勝利へと導く偉大な金正日総書記に対する尽きない敬慕の情をこめて、総書記に送る手紙が採択され、21 世紀の反帝自主偉業に関するカラカス宣言が発表された。

現在、ラテン・アメリカ諸国では、帝国主義者の新自由主義と世界化策動を断固排撃して自主と進歩の道に沿って進

もうという動きが日増しに強化されている。

ラテン・アメリカ諸国は、水力、原油、天然ガス、石炭から地熱にいたる豊かな動力資源と金属および非金属鉱物資源を持っており、森林と漁業の資源も豊かである。

ラテン・アメリカ地域は、かつてアメリカの「静かな裏庭」として呼ばわれ、どの地域よりアメリカ帝国主義の侵略と略奪、干渉策動がひどかった地域である。

ラテン・アメリカでは去る数十年間、アメリカの利害関係に合わないすべての経済的、社会的及び政治的変革の試みが、国内の反動勢力とアメリカ帝国主義の直接的武力干渉により即時鎮圧されてきた。

アメリカの支配主義的策動により、自主的で平和な新しい世界を建設するためのラテン・アメリカ人民の闘争は難関と試練をなめなければならなかった。

新世紀に入りながら経済援助と借金の清算、民主化と人権、そして反テロ闘争と非核化の看板のもとにこの地域に対するアメリカ帝国主義の支配がより強化された。

実生活を通じて、反帝自主だけが繁栄の道であるということを切実に感じているラテン・アメリカ諸国は、アメリカの侵略的で内政干渉的な政策に反対して積極的に戦っている。2007 年 11 月に、イベローアメリカ首脳会議が行われた。会議ではアメリカの支配主義的策動に抗して地域諸国の利益を擁護し、共通の発展と繁栄を遂げるために、ラテン・アメリカ諸

国が互いに団結すべきであるとの声が高くなった。

キューバ、ベネズエラ、ボリビア、アルゼンチンなど地域の多くの国がアメリカの主張する自由民主主義の拡散、アメリカ自由貿易地帯創設の策動に反旗を揚げており、経済貿易分野でアメリカを排撃している。

2008 年 1 月に行われたラテン・アメリカのためのボリバル対案(ALBA アルバ)メンバー国首脳会議では、アルバ銀行を正式に創設した。アルバ銀行が創設された目的は、アルバメンバー国が経済貿易活動で世界銀行及び西側金融機構の束縛を受けず、自主的な経済発展を促していくためであった。

その前である 2007 年に、エネルギーに関する南アメリカ首脳会議が行われた。会議では大陸の一体化実現を最終目的とする経済協力機構である南アメリカ共同体を南アメリカ同盟に改変、拡大することにし、常設の書記局を正式に設けた。そしてエネルギー分野での統合をなすために南アメリカエネルギー理事会を組織することを協議した。

2007 年 12 月には南アメリカの 7 カ国が南銀行創設にかんする書類に署名して地域の経済的統合を早く実現しうる明るい展望が開かれるようになった。

ここで最も意義あり歴史的な出来事は、2011 年 12 月、ベネズエラでアメリカとカナダを除いたラテン・アメリカとカリブ地域の全ての国を包括する、ラテン・アメリカ及びカリブ諸国共同体が誕生したことである。

今までアメリカは1948年に創設されたアメリカ国家機構を通じて、ラテン・アメリカで支配的地位を維持してきた。アメリカはこの機構で特殊な地位を占め、すべての活動を左右していた。自らの言葉を素直に聞かないキューバのような国々にたいして制裁と圧力を加えるなど、不当な態度と措置をとってきた。

加盟諸国の意志とは無関係に、意のままに行動するアメリカにたいし、多くの国が不満を表したりした。

こうした状況の下、地域ではアメリカを排除し平等が保障される新しい機構を創設しようという志向が強くなり、その過程でラテン・アメリカ及びカリブ諸国共同体が創設されたのである。歴史と文化の上で共通点の多い国々からなっているこの機構が、自らの独自性を強化し、国際舞台で地域の重要性をクローズアップさせるであろうのことは確かである。

実際にアメリカの反キューバ圧殺策動にたいして地域諸国が団結して一つの声で糾弾し、キューバとの連帯をさらに強化している。

2013 年 1 月、60 余りの国家首班と政府の代表が参加した中で行われた第 1 回ラテン・アメリカ及びカリブ国家共同体—ヨーロッパ同盟首脳会議では、長い間持続されているアメリカの封鎖策動に抗して戦うキューバ人民に全的な連帯が表された。

地域のほとんどの国家及び政府首班が参加したこの首脳会議は、歴史的にその主人であるアメリカの利益に服従し

てきた腐敗した地域機構であるアメリカ国家機構の終焉を意味するものでもあった。

これについてボリビア新聞「ラ・ラソン」は、アメリカ国家機構という名称をつけた船が沈没する漫画とともに載せた記事で、ラテン・アメリカとカリブ地域での主要問題は、新たに創設された共同体が解いていくであろうと報じた。

メキシコのある分析家は、新しい共同体の誕生は、世界と大陸で起こっている変化の一環である、その変化とはアメリカの指揮棒が今になっては力がなく、地域のブロックの成長が新しい世界的均衡をなしていることだ、と評した。

ラテン・アメリカは、これ以上アメリカの「静かな裏庭」ではない。帝国主義者の強権と専横、覇権主義を断固退けて国の自主権を固守し、地域の団結と安定、平和を実現させているのが、今日のラテン・アメリカの現実である。

ラテン・アメリカ地域で日増しに強化される団結と協力、一体化の動きは、帝国主義者の支配と侵略策動に大きな打撃を与えており、世界の戦略構造を変化させている。

支配と従属に反対し、自主的で正義の新しい世界を建設する闘争はアフリカでも力強く行われている。

アフリカ諸国はアフリカ同盟を創設し、それを通じて国際舞台で発言権を高めている。アフリカ同盟の創設は、アフリカ諸国の団結と協力、復興と発展において画期的意義を持つと言える。アフリカ諸国の一致した見解は、アフリカ諸国間の

団結と協力を強化することが、大陸の発展目標を達成する上で貴重な元手となり、このためにアフリカ同盟と地域経済協力機構の機能と役割を高めなければならないということである。

2013年1月27日と28日にエチオピアの首都アジスアベバでは、国際的関心と期待の中で第 20 回アフリカ同盟及び政府首脳会議が行われた。

会議の開幕演説でアフリカ同盟の委員長は、今回の首脳会議がアフリカ統一機構(アフリカ同盟の前身)創立 50 周年を迎える年に開かれるがゆえにもっと意義があるとしながら、加盟諸国が政治的意志を発揮してそれぞれの国における危機を自力で解決しなければならないと強調した。

現在、アフリカ同盟は同盟の強化に力を入れながら、大陸の統一と発展、平和と安定を実現する上で大きな役割を果たしている。

同盟は自力で地域の紛争問題を解決し、平和と安定を保障するために積極的に努力している。大陸の開発において、西側の「援助」にたいする依存度を弱め、地域の資源を効率的に利用し発展を遂げるための同盟の努力も強化されている。

アフリカ諸国は大陸の発展展望は、アフリカ人民自身にかかっているとしながら自力で大陸の進歩と繁栄をなすためにがんばっており、国際舞台でも自らの尊厳と利益を守っている。

国際舞台で起こっているこうした変化は、帝国主義者が世界政治を主導しながら牛耳っていた時代はもう終わり、すべての国と民族が同等な権利を行使し発展することだけが人類の進むべき道であることをはっきりと見せている。

世界経済の多極化が力強く推進されていることも、最近年自主を志向する国際情勢の発展において注目されることである。

2013 年 3 月 26 日と 27 日、南アフリカのドバンにおいて行われたブリクス首脳会議では、世界総生産高と人口、貿易額で少なくない比重を占めているブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカからなるブリクス開発銀行創設問題が討議された。

開発銀行は、ブリクス加盟国間の貿易決済で民族貨幣を使用する問題と借款提供問題などを主管するという。これはドル依存度を弱めて民族貨幣の利用を積極的に奨励しようという意志の産物である。

ロシア外務省のある専門家も「世界は今、ドルに代わる貨幣を求めている。ブリクス加盟諸国が開発銀行を創設するのもそうした傾向の一つである。本質的にこの開発銀行は、アメリカ、そしてドルに挑戦するものである」と言っている。

これはドル財布を振りかざしながらうぬぼれているアメリカに打撃を与える措置となっている。

現時期、アメリカの支配主義的策動、新植民地主義的干

渉は危機に処している。

反帝自主の流れがすべての大陸、すべての地域に広まっており、これは一つの時代的趨勢となっている。

自主と平和、進歩をめざす人民の闘争によって帝国主義者の支配主義的策動が破綻され、世界は自主化の方向へと激しく前進している。

進歩的な諸国人民の共通した志向、生活上の要求となっている反帝自主の前途を先軍政治が明らかにしている。

今日、先軍政治は大きな牽引力を持って世界人民の心を捉えており、彼らの正義の闘争を力強く鼓舞している。

世界の政治界では先軍が現代の基本趨勢を反映した時代語であり、朝鮮の先軍政治は朝鮮にだけ限った政治ではないと評しながらそれについて学ぼうという機運が急激に高まっている。大洋へと滔滔と流れる大河の流れを押しとどめることができないように、先軍政治の牽引力をはばむことはできない。

反帝自主をめざす闘争が激しくなるほどより威力を発揮しているのが先軍政治であり、時代が前進するほどより高まっているのが先軍に従おうという進歩的人類の志向である。

一方、帝国主義者は先軍政治の威力に恐れをなしている。アメリカのVOA放送は「金正日指導者の先軍政治が発散する力の巨大な幅と無限大の深さは察することも、計ることもできないというところにアメリカの悲劇がある」と悲鳴を上げた。

強権と専横、覇権主義を打ち破って自主と尊厳、真理と正義を守る道はひとえに先軍にある。先軍の旗の下に進歩的人類は、この惑星に自主の新しい世界、正義で繁栄する新しい世界を必ず建設するであろう。

人類の未来は先軍にある。

「人民大衆の自主偉業、社会主義偉業を達成するたたかいは、帝国主義とあらゆる反革命勢力との力の対決を伴うため、軍事は革命の勝敗と、国家と民族の興亡を左右する基本的な問題となります」

金 正 日

5. 代を継いで先軍の道を

今まで先軍革命の原理と先軍革命の原則、先軍政治について論議した。つまり先軍思想の基本体系と内容について話した。しかし私たちは先軍の話をここで終えることができない。それは先軍の旗を高く掲げて前進している朝鮮の現実について語るにはそれだけでは足りないからである。

それゆえ、先軍の旗を高く掲げて祖国と民族の運命を守護し、強盛国家建設を賢明に導いている敬愛する金正恩同志の指導にたいする話を続けて行こうと思う。

朝鮮の反日民族解放運動の卓越した指導者である金亨稷先生は早くから「志遠」の思想を打ち出した。この「志遠」の思想は、祖国と民族のためのたたかいで真の生きがいと幸せを求める革命的人生観であり、代をついでたたかってでも必ず国の解放を遂げなければならないという百折不撓の革命精神である。

革命の継承は、思想の継承にある。「志遠」の思想は、金日成主席と金正日総書記によって、代をついで立派に継承された。

「志遠」の思想を最も貴い革命の遺産として譲り渡された金日成主席は、前人未踏の困難な試練の道をかき分けてきた。

その道で独創的な先軍革命指導により抗日武装闘争を勝利へと導いて祖国解放の偉業を成し遂げ、アメリカ帝国主義の武力侵攻を退けて自主、自立、自衛の社会主義強国を立ち上げた。

金日成主席の崇高な志を受け継いだ金正日総書記は、誰も体験したことの無い先軍の長途を歩んだ。

その道で一回の世界大戦にも匹敵する帝国主義との対決戦を勝利へと導いて祖国を固く守りぬき、社会主義強盛国家建設と祖国統一をめざすたたかいを賢明に導いて祖国の歴史に末永く輝く不滅の業績を積み上げた。

主席と総書記が一生涯歩んできた先軍の道は、敬愛する金正恩同志によって代をついで引き継がれている。

金正恩同志は革命のバトンをしっかりと捉え、金日成民族、金正日朝鮮を代をついで輝かすために先軍の道へと朝鮮人民を賢明に導いている。

その先軍の道に刻まれた金正恩同志の指導があったがゆえに、今日、朝鮮では類のない帝国主義者の対共和国圧殺策動をそのつど打ち破りながら社会主義朝鮮を固く守り抜き、強盛国家建設を力強く前進させているのである。

1） 世界を震撼させた初の公開演説

2012年4月15日、世界の耳目は朝鮮に、平壌に集中された。

ちょうどこの日、敬愛する金正恩同志が、偉大な金日成主席の生誕100周年慶祝閲兵式に参加して「**先軍の旗をさらに高く掲げ、最後の勝利をめざして力強くたたかおう**」という初の公開演説をしたからである。

一般的に指導者の初の公開演説は、彼の政治活動においてきわめて重要な位置を占める。公開演説を通じて指導者の路線と政策の基本方向が特徴付けられるからである。

それゆえこの日、世界の多くの通信、放送は、平壌の声に耳を傾け、波長を朝鮮に合わせた。

金正恩同志はこの日の演説で先軍の旗を変わりなく掲げ、先軍革命の最後の勝利を遂げる上で提起される問題について最も明哲で完璧な科学的回答を与えた。

金正恩同志は、演説で偉大な主席と総書記の賢明な先軍指導、先軍政治によって朝鮮人民が誰もあえて侵すことのできない自主的人民としてその尊厳をとどろかせていることについて指摘した。

朝鮮半島は地政学的位置から見るとき、大陸と海洋が交差する要衝である。こういうところから朝鮮は、かつて周辺を

囲む強国の角逐戦の舞台としてあらゆる受難を宿命のように甘受してきた。風流韻事にふける封建支配層と事大の風波により弱りに弱った朝鮮に貪欲の目を向けた侵略者はしきりに襲ってきた。

アメリカ帝国主義の「シャーマン」号が大同江に撃沈されて10年も経たないうちに日本帝国主義の「雲楊」号が朝鮮侵略の合法的理由を作り出す野望のもとに計画的な武装挑発をしてきた。この事件を契機にして日本帝国主義は侵略的で従属的な不平等条約を強要したが、それを撃退するだけの口実がなかった朝鮮封建政府は、1876 年 2 月「朝日修好条規」(「江華島条約)ともいう)を締結しなければならなかった。

この時から半植民地の絆を掛けられあらゆる屈従と蔑視を受けながらも抗弁一言すら言えなかった朝鮮はその後日本帝国主義の完全な植民地になってしまった。

亡国の悲運を嘆く万民の怨嗟が天地を揺るがしたが、日本帝国主義のあくどい強盗さながらの行為を阻止するだけの力はなかった。

地政学的位置が一国、一民族の不遇な運命を決定する根本的条件となってはならない。にもかかわらず過去の朝鮮の運命は侵略と略奪を避けない宿命のように受け入れざるを得なかった。

朝鮮半島の地政学的位置は少しも変わらず昔と同じである。しかし、百戦百勝の先軍統帥である金日成主席と

金正日総書記を戴いてからは、亡国の恥辱と民族受難の悲劇を強要された朝鮮の歴史が永遠に終わってしまった。

昨日の弱小国から今日にはいかなる強敵をも一撃の下に退けうる無敵の軍事強国に転換した。

これは決して、歳月がもたらした偶然ではなく、主席と総書記が先軍の旗じるしのもとに無敵必勝の革命武力を強化してきた結果もたらされた必然である。

朝鮮革命の行路には、強大な帝国主義者との生死を分かつ厳しい対決戦もあり、富強祖国の万年礎石を築く大建設戦闘もあった。その日々に領袖決死擁護の旗を掲げて、チュチェ革命の命脈を先頭で守ってきたのは他ならぬ人民軍であった。

2挺の拳銃から始まって自己発展の第一歩を踏み出した人民軍は、今日、帝国主義侵略者を戦慄させる無敵の強兵になった。軍事技術的優勢はもはや帝国主義者の独占物ではなく、敵が原子爆弾で朝鮮を威嚇していた時代は永遠に過ぎ去っている。

人民軍は自らの名前に「人民」という文字を刻み込んだ時から、祖国の守護者としてだけでなく、人民の幸福の創造者として富強な祖国の建設にも明確な足跡を残した。祖国の津々浦々に立ち上がった記念碑的創造物と人民生活に寄与する数多くの社会主義の財貨には、人民軍将兵たちの貴い血と汗がこもっている。

領袖の軍隊、党の軍隊、人民の軍隊として誇り高く、無敵必勝の威容をとどろかせている白頭山革命強兵こそは、主席と総書記が残した最大の愛国遺産であり、このような遺産を譲り受けたのは朝鮮の大きな幸運であり、誇りである。

金正恩同志は、演説で金日成民族の新しいチュチェ100年代が進むべき前途を明らかにした。

金正恩同志は次のように述べている。

「われわれが先軍朝鮮の尊厳を万代に輝かせ、社会主義強盛国家建設の偉業を成功裏に達成するためには、一にも二にも三にも人民軍を全面的に強化していかなければなりません」

自主は国と民族の生命であり、勝利の永遠な旗じるしである。強い自主の支柱、民族自尊の精神力によって祖国の尊厳が輝き、強盛繁栄が実現される。

先軍は朝鮮革命の永遠な百戦百勝の霊剣である。先軍によって金日成民族、金正日朝鮮の永遠に繁栄する未来が確固と裏付けられている。

社会主義は朝鮮人民の理想である。社会主義をより輝かせ繁栄させていくところに朝鮮人民の明るい未来がある。

自主、先軍、社会主義の根本的裏づけは、ほかならぬ人民軍を強化するところにある。

兵敗は山崩れのごとしという言葉もあるように、軍隊が崩れると国と民族も、主権も和睦もみな崩れてしまう。結局、軍

隊がいなければ、国と民族、人民の運命について考えられない。

人民軍を強化するところに、朝鮮の自主権と尊厳、富強・繁栄の道がある。

人民軍は、今後も党の指導に従って雪道を先頭でかき分けながら党の偉業を銃剣で確固と保証していく先軍革命の頼もしい尖兵、磐石のような支点となるべきである。歳月が流れ、世代が十回、百回代わっても変わりえないのが人民軍の革命的本態であり、朝鮮労働党の赤い旗を第一の軍旗として高く掲げていく白頭山革命強兵の闘争方式である。

金正恩同志の演説には、主席と総書記の手元で無敵の革命強兵に、先軍革命の主力部隊として育成された人民軍の 80 年間の歴史にたいする誇り高い総括と今後も党の偉業を銃剣でしっかりと保証していくであろうという期待が込められている。

金正恩同志のこの日の演説は、先軍思想が指し示す道、党の先軍政治を奉じていく道を革命の変わりのない座標、闘争の永遠な戦略として規定した歴史的な演説である。

それは白頭山革命強兵の尽きない威力で、金日成民族、金正日朝鮮の歴史を永遠に輝かしていこうという、ゆるぎない意志の宣言であった。

「最後の勝利をめざして前進しよう！」

金正恩同志のこの戦闘的呼びかけは、千万軍民の心を激動させ、彼らを新しい奇跡と偉勲へと導いている。

空の太陽は光と熱で万物を育てる。革命を導く指導者は思想理論で自主性をめざす人民大衆の闘争を勝利へと導いていく。

偉大な哲学と偉大な思想の中に偉人の高さがある。こういう意味で偉人の高さは、哲学的英知の高さであり、思想の高さであるといえる。

敬愛する金正恩同志の偉人的高さは、抜きん出た思想的・理論的英知にあり、金正恩同志の偉人像で第一の表徴は、時代の傑出した思想・理論家、時代の導き手だというところにある。

金正恩同志は、卓越した思想・理論活動で、朝鮮人民を先軍一途へと導いている。

それは金正恩同志が、2012 年の 1 年間に発表した著作を見てもよく分かる。

金正恩同志は、「**偉大な金日成同志はわが党と人民の永遠なる領袖である**」、「**偉大な金正日同志をわが党の永遠なる総書記として高く戴き、チュチェの革命偉業を立派に成し遂げよう**」、「**金正日的愛国主義を具現して富強な祖国の建設を推し進めよう**」、「**社会主義強盛国家建設の要求に即して国土管理事業に革命的転換をもたらすために**」「**明日の強盛朝鮮を支える柱となれ**」を始め、数多くの著作を発表して時代と革命が進むべき前途を明らかにした。

金正恩同志の指導が始まった時から朝鮮で創造されて

いる前例のない奇跡と革新は、その思想理論の独創性と正当性、生命力を物語るものである。

実に敬愛する金正恩同志は、特出した偉人的品格と資質を所有して独創的な思想理論活動で時代の前途を明らかにする卓越した思想・理論家である。

時代を導く金正恩同志は、朝鮮の最高指導者であり、先軍朝鮮の強大さと百戦百勝のシンボルである。

朝鮮人民は金正恩同志がいれば必ず勝利するという強い信念を持っている。

卓越した思想・理論で千万の軍民を先軍の道へと導く偉大な白頭の統帥がいるがゆえに朝鮮人民は最後の勝利をめざして力強く前進しているのである。

2） 強硬には超強硬で

中東のある文筆家は、「アメリカは今日のプロクルステスである。アメリカは自らの基準に合うか合わないかを見て、合わない場合には容赦なく懲罰する。アメリカの『プロクルステスの寝台』は大きな国であろうが、小さな国であろうが容赦が無い」と書いている。

古代ギリシア神話によれば、通り過ぎる人々に悪事を働く者があったが彼の別名がプロクルステス、すなわち引き伸ばすやつ、鉄の寝台の泥棒であった。彼は自分の家の前を通

る人々を捕らえて背の低い人であれば長い寝台に合わせて体を引き伸ばして殺し、背の高い人であれば小さな寝台に合わせて外に出た足を切って殺した。この神話からして「プロクルステスの寝台」という言葉は、自分の意思を強引に押し付ける行為、まったく合わない基準と要求を無理やりに受け入れろと強要する、横暴な行為を例える言葉として通用されている。

現時期にもこのような「プロクルステスの寝台」のように、国際舞台で自らの気に障る国々にたいして強権と専横、覇権主義をこととする勢力がある。それは不正の本産地であり、地球の悪性腫瘍であるアメリカである。

アメリカは自らが「全人類の共通の希望を代表」すると言いながら、アメリカの「指導力と決心」によって世界が変化すると広告している。軍事力を振りかざして世界を制覇しようというアメリカの一極化策動は、「強大国の自国中心主義」という反動思想に根ざしている。アメリカは自らの覇権のためなら何も構わない。これは世界に君臨することを当然のことのように思うアメリカの傲慢さがどの程度であるかを如実に見せている。世論もこれにたいして驚愕している。

「極度に傲慢な一方主義で特徴付けられるアメリカの専横と独断により、現世界には中世のような無秩序が蔓延り、国際法は完全に無視されている」、「アメリカは、世界が奴隷社会に逆戻りし、自分たちはそれらすべての上にいる奴隷主に

なろうとしている」と暴露したのは決して偶然ではない。こうした暴虐非道なアメリカは、自主と正義、社会主義の旗を高く掲げて前進している朝鮮を孤立圧殺するために、侵略と戦争策動をさらに強化した。

強硬には超強硬で！これは敬愛する金正恩同志の胆力、気概である。

金正恩同志は正義を抹殺しようとする行為にたいしてはいささかの妥協も知らない無比の胆力、世界の進歩と平和のためにすべてをささげてたたかう強靭な度胸の持ち主である。

金正恩同志の先軍指導に従って、朝鮮の千万の軍民は敵の侵略と戦争挑発策動を断固と退けて国と民族の尊厳を守護している。

2012 年 8 月、金正恩同志は西南戦線最南端のホット・スポットに位置した長財島防御隊とム島の英雄防御隊を視察しながら、わが領土にたった一発の砲弾でも落ちるなら即時的にせん滅的反打撃を与えて、祖国統一の大戦へとつなげていくように命令した。

長財島とム島が世に知られるようになったのもこの時からである。祖国の防衛線に心をつないで兵士たちとともに生きるという朝鮮人民であったが、兵士たちが守っている哨所に長財島とム島というところがあると知っている人は別にいなかった。

長財島とム島は、2010 年 11 月、敵が共和国の領海に砲

射撃を敢行した延坪島を目前にしている。

朝鮮の西海上に位置している延坪島は、面積が 6.8 ㎡、周りの長さが約 18km しかならない小さな島である。その水域は昔から魚の種類と漁獲量において朝鮮西海のどこよりも豊かな漁場として有名であり、外国の人々も羨んでいた所であった。

こうした生のよりどころが南朝鮮の好戦勢力によって海兵隊と砲武力が集中配備された北侵前哨基地と変わってしまった。南朝鮮の好戦勢力は延坪島周辺海域で挑発行為を行い、朝鮮人民軍の対応打撃を受けた。

長財島とム島は、敵がすぐ前で虎視眈々挑発の機会だけを狙っているところ、世界の焦点が集中されたところであった。

金正恩同志が、その最大のホット・スポットに位置した長財島とム島を訪ね、人民軍軍人の祖国決死守護の意志を励んだのである。

金正恩同志はアメリカを頭とする敵対勢力の無謀な戦争演習騒動により一触即発の情勢がかもし出されていた 2013 年 3 月 7 日、再び長財島とム島を訪ねた。

アメリカ帝国主義の策動は 2013 年に入ってより露骨になっていた。この時期に朝鮮民族と国際社会の一様な反対糾弾にも関わりなくアメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味は、3 月 1 日から北侵を仮想した「フォール・イーグル」合同軍事演習を、3 月 11 日からは「キーリゾルブ」合同軍事演習を行った。

アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡が行っている「フォール・イーグル」合同軍事演習と「キーリゾルブ」合同軍事演習は、朝鮮に対する核先制打撃を狙った予備戦争、北侵核戦争実験であった。

南朝鮮の国防部が明らかにしたことによれば、3 月 1 日から4 月 30 日まで行われる「フォール・イーグル」合同軍事演習には海外駐屯アメリカ軍 1 万余名を含むアメリカ侵略軍と南朝鮮軍の膨大な武力が、3 月 11 日から21 日まで行われる「キーリゾルブ」合同軍事演習には米軍 3500 名と南朝鮮軍の軍団級以上の兵力 1 万余名が参加した。これにはアメリカ核空母艦「ジョージ・ワシントン」号と「B−52」戦略爆撃機をはじめとする最新核戦争装備が動員された。そしてイギリス、オーストラリアをはじめとする、去る朝鮮戦争に加担していたアメリカの追従国家武力まで参加した。一回の戦争を行って余る大規模の武力と核攻撃の手段が投入された今回の演習は、反共和国敵視政策の集中的表現であり、朝鮮半島であくまでも新しい戦争を起こそうとする危険な行為であった。敵が刀を振りかざせば長剣で、銃には大砲で、核兵器にはそれよりもっと有力な精密核打撃手段で対応するというのが朝鮮の確固たる立場であり原則である。金正恩同志は長財島とム島を防御する兵士たちが敵の一挙一動を、警戒心を持って注視し、われわれの自主権が行使される水域、あるいは地域にたった一発の砲弾でも落ちるなら、滞りなくせん滅的反打撃を与

えて祖国統一大戦の初の砲声、信号弾を打ち上げるようにといった。金正恩同志は前線部隊を始め、陸軍、海軍、航空及び反航空軍、戦略ロケット軍の将兵たちが朝鮮式の全面戦を開始する万端の準備を整えているといいながら、敵が鋭敏な水域でまたもやわれわれに手出しするなら、千金を払ってでも買えない機会を絶対に逃さず、全戦線で正義の祖国統一の大進軍を開始するよう命令を下すと力をこめて言った。

金正恩同志は敵の狂乱的な侵略戦争騒動が極度に達していた3月11日、敵がとぐろを巻いている白翎島が咫尺で眺められる前哨基地—月乃島の防御隊を視察した。長い時間にかけて島の地形地物と火力機材の配備状態、軍人の生活状態を具体的に調べた金正恩同志は、火を持って遊ぶ者は火に焼けて死ぬという言葉もあるように、死にたくて一番厳しいホット・スポットで火をもてあそぶ敵に、命令が下されば痛烈な打撃を与えるようにといった。

金正恩同志はこの3月にも国の自主権と人民の安全を守るために、先軍指導の道を歩み続けた。その道で大延坪島、白翎島打撃に参加する砲兵区分隊の実戦能力を判定する実弾射撃訓練、超精密無人打撃機の対象物打撃と低空で来襲する「敵」の巡航ミサイルを消滅する姿行高射ロケット射撃訓練、大連合部隊と海軍連合部隊の上陸及び反上陸訓練を指導した。人民軍を無敵の革命強兵に準備させるようと呉仲洽7連隊称号を授与された朝鮮人民軍の各部隊も指導

している。

2013 年 3 月 29 日、0 時 30 分、

金正恩同志は、最高司令部で朝鮮人民軍戦略ロケット軍の火力打撃任務の遂行と関連した作戦会議を緊急招集した。

金正恩同志はアメリカ帝国主義が膨大な戦略武力を引き入れて無謀な挑発行為をするなら、その牙城であるアメリカ本土とハワイ、グァム島を始め、太平洋作戦区域内の米軍侵略基地、南朝鮮駐屯アメリカ基地を容赦なく打撃すべきであると言いながら戦略ロケット軍の火力打撃計画を検討して最終批准をした。

金正恩同志はわれわれの革命的武装力はアメリカ帝国主義の核脅威には無慈悲な核攻撃で、侵略戦争には正義の全面戦争で答えるであろうといった。

金正恩同志は、正義の偉業のために立ち上がった人民にかなうものは、この世にないということは歴史によって実証された真理である、アメリカ帝国主義の許しがたい醜態によりこの地でまたもや願ってもいない戦争が起こるなら、その戦争でアメリカ帝国主義は恥ずかしい破滅を、わが民族は祖国統一の明るい日を迎えるであろうといった。

アメリカ帝国主義によって核戦争の導火線に火がついている厳重な情勢の中で金正恩同志が下した重大な決心は、世紀をついで続いているアメリカとの対決史に終止符を打ち、新しい歴史のページを開く転換的な契機となった。

金正恩同志の賢明な指導の下に朝鮮人民軍は、無敵の革命強兵としての威容を遺憾なくとどろかせている。

戦線軍集団をはじめとする各軍種、兵種部隊と労農赤衛軍と赤の青年近衛隊の隊員たちは最終サインした作戦計画によって全面対決戦に入った。一点の火花でも落ちたら即時せん滅的打撃を与えて祖国統一の聖戦を行い、民族の最大の宿願を実現する鉄のような意志で全国が沸いた。

アメリカ帝国主義が核兵器を持って飛び掛れば朝鮮は多種化された固有の精密核打撃手段で対抗する。発射されれば一瞬にしてアメリカ帝国主義の侵略基地は焦土化され、アメリカ帝国の葬送曲が響くようになるであろう。

朝鮮の千万の軍民は決起して、固めてまた固めてきた先軍の威力で侵略者、挑発者を徹底的に撃滅するであろう。

以前イタリアのムッソリーニは、「弱肉強食は、人類生存の根本法則」であるとしながら侵略の教理を正当化した。この言葉は弱小諸国を踏みつくして世界を支配しようという帝国主義者の本性を見せている。

帝国主義者の強硬に超強硬で対抗し、無分別の挑発には強力な物理的対応をしてこそ国と民族の尊厳を守りぬけることができる。

金正恩同志をいただいたがゆえに先軍の偉業が代をついで受け継がれ、朝鮮人民軍は白頭山革命強兵としての威容を力強く誇示しているのである。

敬愛する金正恩同志の先軍指導があるがゆえに、朝鮮は誰も侵すことのできない偉大な先軍の国としてその尊厳をとどろかせている。

3）一気に

最近朝鮮の精神と気概が含蓄された一つの言葉が新しい意味で時代を揺るがしている。

「一気に」、朝鮮のどこへ行ってもよく聴ける言葉である。

人民軍軍人はこの言葉を愛用している。その言葉をモットとして勇猛さを培い、敵撃滅の闘志も鍛えている。山を越えても、河を渡っても一気に、偉勲を立てても、勝利を収めても稲妻のように一気にやるのが人民軍軍人の気質であり、性格である。

人民軍が革命の主力部隊として威容をとどろかせている先軍時代とともに、「一気に」という言葉は祖国防衛の前方でだけでなく、創造と建設の戦線で兵士たちの英知と決死貫徹の精神力を象徴する言葉としてその意味を新たにしている。

人民軍の「一気に」の攻撃精神は大飛躍の炎を燃え上がらせている。

平壌の都心部には、チョンリマ銅像がある。一気に千里を飛ぶというその軌跡の駿馬は、20 世紀を越えて 21 世紀にもその羽を広く開いている。

多段階に驚異的出来事を生みながらチョンリマにのって走る朝鮮の進軍速度は、最後の勝利が近づくほどもっと早くなっている。朝鮮人民と人民軍の気迫と足取り、前進速度がこの閃光のような「一気に」という言葉の中にみな込められている。

「一気に」という言葉は敬愛する金正恩同志の先軍指導に従って、銃剣を先立たせ、理想実現の近道を走る朝鮮の強い姿である。

朝鮮革命はいつも帝国主義者の孤立圧殺の逆風の中で前進してきた。苦難と試練の峠を無数に越えなければならなかった最近年、朝鮮人民は共和国を呑み込もうとより躍起になっている敵の侵略的策動に主動的に対処しうる、強力な戦争抑止力を整えるのに総力を注がざるを得なかった。

現時期、多くの国と民族は富強発展を遂げて世界の前列に立とうと競争的に努力している。こうして見れば、現代は、時間の競争、速度の競争の時代であるといえる。

今、朝鮮人民の前には、敵の侵略策動を一撃のもとに粉砕するのが死活の問題として提起されている。これとともに経済強国の目標を一気に達成することもそれに劣らぬ重要な問題として提起されている。

勝利の上にさらなる大きな勝利、一回目の跳躍による奇跡、一回目で勝利の創造物を林のように立ち上げることにより、歴史の逆風を乗り越え、国と民族の富強・繁栄、発展を遂げるのが強盛国家建設で朝鮮の人民と軍隊が担っている重大

な任務である。

朝鮮は「一気に」の気概で目標と理想を高く立てて、言葉通りモデルになりうることをたくさん展開している。

時間に縛られた消極的な目標ではなく、スケールの大きい、大胆で遠大な目標を基準にして前進の時間表を作成し、時代の要求を基準にして新しい記録を創造しつづけている。

「一気に」の攻撃精神は、決戦の場で出たのでもなく、戦後の廃墟の上で出たのでもない。党と領袖、祖国と人民のための祖国繁栄の進撃路で発揮された人民軍軍人の「一気に」の攻撃精神は、苦難の中でより強くなった朝鮮民族の気質、先軍朝鮮の気概を見せている。

「一気に」の攻撃精神が発揮される中で 2012 年、朝鮮では新しい軌跡と偉勲が創造され、この地にはそれこそ拍車を加えた駿馬の気概が満ち溢れるようになった。

金正恩同志は次のように述べている。

「人民軍と人民内務軍の将兵は、『一気に』の気概で強盛国家建設の主要部門で進撃の突破口を開き、人民の幸せのためのよいことを多くして、党と人民の信頼と期待に立派に応えました」

「一気に」の気概で 2012 年の強盛国家建設と人民の生活を向上させるための闘争で収めた成果について振りかえてみよう。

2012 年、複雑で厳しい情勢がかもし出され、ひどい自然

災害が連続的に押し寄せてきたなかでも、朝鮮の人民と軍隊は、堅忍不抜の意志と百折不撓の闘争を行い、強盛国家建設と人民生活向上で大きな前進を遂げた。

偉大な金日成主席の生誕100周年に際して熙川発電所が竣工した。

高く険しい狼林山脈に開かれた大人工湖水と北方の山岳を両手に抱いて威厳をとどろかす雄大なダム、海抜高がほぼ 600 メートルもなる山頂から、滝のごとく壮快に配された圧力鉄管路と無数の送電線……

国の電力問題を解決する上で重要な位置を占める熙川発電所の建設は実に膨大な建設工事であった。

それゆえ 2010 年 12 月熙川発電所の建設現場を訪ねた多くの外国人たちの質問は同じであった。

果たして 2012 年まで発電所の建設を終えることができるだろうか？太古の険しい山と峰という厳しい条件であれほどの短い期間に工事量の 60％を突破している成果に驚きを禁じえずにいながらも繰り返していたその質問。

それに人民軍軍人は「一気に」というこの痛快な文字で答えた。

彼らは、普通なら百年、千年がかかるという工事を一気に完遂しようと、熱烈な祖国愛を発揮して決死の覚悟で一日一日をたたかった。

発電所の建設を始める当初、何もかもなれていなかった

兵士たちは、削岩機の操作法、ウインチ運転操作に関する講習を受けることから初の戦闘を始めた。その兵士たちが今は世界知的所有権機構の最高発明家賞とメダルなど、多くの国家発明証書、創意考案賞なども授与されている。

銃を扱っていた兵士たちであるが、発電所の建設を専門的にやってきた人々も想像できなかった、ダムのコンクリート打ち作業の左右上下同時展開の奇跡を創造して人々を驚かせた。何を一つ創造するにしても千年、万年保証する最高のものを志向しながら未知の世界を突破する粘り強い探求精神、創造精神を発揮した。彼らの探求精神、創造精神は龍林ダムに書かれていた「千年責任をもち、万年保証しよう！」というモットが見せている。

「一気に」の精神は単に人民軍軍人の中でのみ発揮されたのではない。

それは敬愛する金正恩同志と腕を組み肩を並べて歩幅を同じくしていく全朝鮮人民の活動方式となっている。

朝鮮人民の英雄的闘争によって東海の荒波の中で端川港が改築され、郭山干拓地の第 2 段階建設が終わって祖国の大地が広くなり、南浦—平壌海水輸送管の建設も完工された。チュチェ化、現代化が実現した数多くの工場、企業所も立ち上がり、基幹工業部門の重要生産基地が現代科学技術に基づいて立派に改築された。

2012 年には平壌市の随所に記念碑的創造物が連続的

に立ちあがり、首都の姿が天地開闢された。

景観の優れた大同江の畔に人民の思想感情と美的志向、新世紀の要求に合う倉田通りが立ち上がった。数千世帯もある高層及び超高層住宅と人民劇場、地上と地下に立体的に配された立派なサービス基地が新たに竣工された。こうして平凡な勤労者たちが無償で新しい住宅に入居し、文化情緒生活上の便宜が最大に保障されるようになった。

いるか館と遊泳場、遊戯場、ミニゴルフ場からなっている綾羅人民遊園地が造形化、芸術化のモデルとして立ち上がった。

金亨稷師範大学が立派に改築され、倉田小学校、ギョンサン幼稚園とギョンサン託児所が遜色なく竣工され、いたるところで人民の幸せの笑い声が響いている。

跆拳道聖地館と羊角島スポーツ村、人民野外アイス・スケートリンク、ローラ・スケートリンクのようなスポーツ活動の拠点が大きな規模で建設され、国のスポーツの発展をより力強く推進するようになった。

柳京ヘルスセンターと第 1 風呂場が近代的に建設され、平壌産院乳腺腫瘍研究所と統一通りの運動センターをはじめとする大衆医療サービス基地も近代的に建設されて、人民の健康増進により寄与するようになった。

万寿橋食肉店と清涼飲料店、普通江水産物店が立派に建設され、膨大な敷地面積に平壌民俗公園が作られ、

万景台遊戯場と大城山遊戯場をはじめとする多くの遊園地と公園が時代の要請にふさわしく立派に改築された。

新しい町と近代的な建築美を誇る教育及びスポーツ文化施設、遊園地と公園、実にそれは金正恩同志の崇高な人民観と祖国観、未来観が具現された愛の結晶体であり、社会主義朝鮮の万年財貨である。

1 年という短い期間に平壌市に林のように立ち上がった記念碑的創造物は、「一気に」の攻撃精神で人民の最高の理想を実現していく偉大な金正恩時代の真の姿を見せている。

金正恩同志の先軍指導の下に朝鮮人民が稲妻のような攻撃精神で祖国の地に立ち上げた創造物とともに、「一気に」という言葉は強盛国家の建設方式となった。

1 年という期間は歴史の上では、一瞬間に過ぎない。しかし、朝鮮人民は 1 年の間に祖国の歴史に輝く足跡を無数に残し、チュチェ革命偉業の完成をめざす闘争で大きな前進をもたらした。

金正恩同志の指導の下に強盛国家をめざす朝鮮の人民と軍隊の足取りはもっと早くなるであろう。

終わりに

先軍思想が私たちに教える一つの真理がある。

それは、国と民族の自主権と尊厳、繁栄と発展が銃剣、軍事力に正比例するということである。

銃剣、軍事力が強ければ国と民族の尊厳、富強・繁栄が保証されるが、そうでなければ国と民族はその運命さえ守れなくなる。どの国、どの民族の歴史と現実を掘り下げてみてもその運命、興亡・盛衰は、銃剣、軍事力と関連している。

銃剣が強ければ国の対外的権威も高くなり、民族の輝かしい未来も保証される。

正義の力、強力な軍事力を持てば、小さな国も強国になりえ、繁栄することができるということを先軍の旗を高く掲げて進んでいる朝鮮の現実は見せている。

今日、先軍思想は世界を照らしている。21 世紀の人類の反帝自主偉業をおし進め、国と民族の富強・繁栄の進路に科学的な解答を与えている先軍思想は時代の発展を先導し人類の未来を照らしている。

2013 年 4 月 11 日、ロシア新聞「ザブトラ」は「金正恩同志は勝つ」という題の論説で次のように書いている。

「朝鮮は独立と自由、そして人民が選択した神聖不可侵

のものをもっとも大きな価値と思う先軍の祖国、堅忍不抜の国、屈しない英雄の国である。敵の爆弾と誹謗中傷、いかなる威嚇と無慈悲な宣伝攻勢の中でも、驚くべき自らの文明と赤い世界、高価な結晶体を建設している。これが大きな流れとなって他の大陸にも伝播されつつある。朝鮮は大国と対峙して戦っている。朝鮮は人類に正しい選択の道を教えている」

先軍思想の示す道、実にこの道は人民の自主性を実現する道、国と民族の自主権と尊厳を固守し、隆盛・繁栄をもたらす真の道である。

自主と繁栄の門は先軍で

著　者：金蒼景
発行所：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発　行：チュチェ103（2014）年 5月

ㄱ-4835039

E-mail:flph@star-co.net.kp
http://www.naenara.com.kp

朝鮮・平壌

チュチェ103（2014）年

ISBN 978-9946-0-1122-6